
IS 一角と少年 にっ!

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 一角と少年 にっ！

【Nコード】

N1034X

【作者名】

楚良

【あらすじ】

今度は夢じゃなく、現実。

もう一度、物語を始めよう！

本当の僕の物語を！

※『IS 一角と少年』の続きです。

そちらを見ても楽しめますが、見なくても楽しめるように書きたいと思います。

プロローグ（前書き）

どうも、作者の楚良です。

当小説は『IS 一角と少年』の続きです。

まあ、前作は夢オチだったので、今度は現実です。

しかもISがいろいろごっちゃだったんですが、今回は正真正銘、ユニコーンガンダム一筋で生きたいと思います。

完結へ向けて、気合と根性、そして勢いで頑張りたいと思っているので、応援よろしくお願いします！！

プロローグ

少し前に、夢を見た。

自分がIS学園に行って、いろんなことをする夢。

正直、馬鹿げてた。

一角のワンオフなんて、発動させたことなかったし。
第二形態なんて行けるはずもなかった。

だって、僕は本当は弱虫で、意気地無しで、ISに乗って戦闘なんてできないんだから。今まででのISの稼働時間なんて、一日はおろか、半日にも満たない。だからワンオフやら第二形態とは、ぶっちゃけたらほとんど無縁だ。

でも、今度は違う。

夢でも、幻でも、何でもない。現実だ。

本当の本当に、正真正銘、正式にIS学園に入学する。

男でISを動かせるなんて、僕だけだ。

夢で見たあの優しそうな男の人は今の今まで公表すらされていない。
それはつまり、僕だけ、ということなのだ。

別に気にはしてない。

ただ、1人はやっぱりさみしいだろうなあ、そう思ったただけだ。

「今日からここで3年間、かあ・・・」

何事もなく、とはいかないと思うけど、出来るだけ平和に過ごしたい。

そんな僕の願いは、入学初日に砕かれたのだった。

プロローグ（後書き）

次回はとりあえず、キャラ紹介。

主人公とヒロイン（一夏）と使用IS紹介です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

キャラ紹介

名前…アルフォンス・ラプラス（愛称はアル

性別…少年（男の娘

年齢…13歳（飛び級

性格…人の前では強気だったりするが、実は弱虫で意気地なし

基本優しいが、怒ったら物凄く怖い

容姿…後ろ髪が少し長めのセミロング

備考…フランス出身の男の娘で本作主人公。

家族はいない。1人旅の途中中東になぜか興味を持たれてついて行く。束の身の回りの世話をすることから料理や家事が得意。

意外に努力家で飛び級ができるほど頭が良かったりもする。

誕生日は4月9日。琥珀色の髪と瞳で、身長にみあわず物凄い大食漢。

後ろ髪がなぜか長くて、ゴムでまとめている。1人旅で鈴と千冬とラウラ、幼いころにシャルロットと面識あり。

性格はちょっと感情的。

少し引き気味だが勝気や強気な面を装ってはいる。

それでも本当は弱虫で意気地なし。

怖いものは怖い、女性でも苦手な人にはあんまり係わりたくないと思ったりもしている。それでも根は強く、本気でやると決めたことには本気で取り組む。

主人公なのでやっぱり鈍感。

使用ISは『一角・零式』（ユニコーン）

ICV…水橋かおり（ラハールの声

イメージイラスト ←

> i 3 2 0 0 9 — 2 0 5 4 <

名前…織斑一夏

性別…女性

年齢…15歳

性格…基本優しい。原作に似た性格

容姿…千冬の学生時代？

備考…原作主人公にして本作ヒロイン。なんでか女。

前作ではアルの兄的な立場だったが、今回は一転してメインヒロイン。

黒髪で千冬似。細かいところは原作同様。

アルの学園での一番最初の友達で、箒と鈴の幼馴染。

家事全般が普通の女子と比べて異常に高く、そこらへんのお母さんよりもお母さんっぽい。当然料理とマッサージも大得意。

恋愛に関しては意外に積極的。一番最初に行動に出ることが多い。

使用ISはやっぱり白式。第二形態に行く予定は今のところなし。

ICV…豊口めぐみ（はっちゃけた感じ）

機体名…『一角・零式』（名称は一角、もしくはユニコーン

備考…アルの専用機にして束お手製の力作。

メインカラーは白で展開装甲を持った全身装甲のIS。
待機状態は純白のネックレストップ。

アルの専用機なのだが、稼働時間が半日にも満たない。

今のところはドイツで行ったラウラとの模擬戦と、初期のフォーマライズとフィッティングのみ。

稼働時間が短すぎるため、どんなISかは千冬でも謎。

アルの感情に反応して姿を『デストロイモード』に変えることがあるが、今のところはない。元ネタはユニコーンガンダム。

機体装備…

・ビームマグナム

一角の主力武器。マグナムの名の通り威力は絶大。

最大5基のカートリッジタイプで、使える弾数は予備のカートリッジを含めて最高15発。威力が高すぎて使い勝手が悪い。

・ビームサーベル

バックパックに2基と両腕に1基ずつの計4基。

両腕のグリップは180°。展開可能。バックパックの2基は基本的には使えないが、デストロイモード時にだけ展開される。

- ・ハイパーバズーカ

一角唯一の実体弾火器。

時間差で炸裂するタイプの弾と通常の弾を撃つことができる。

誘導性はそこまで高くはない。

- ・ビームガトリングガン

4銃身式大型機関砲。

両腕に1挺ずつ、もしくは連結させて片腕に2挺装備可能。

両腕に4挺ずつ装備させることも出来るが、アル本人は片腕でもすごく重い、とのことから1艇を手で持って使っている。

エネルギー充填式で、コイルしてからすぐには使えないという欠点があるが、過剰な威力を誇るビームマグナムよりも多くつかわれる。

- ・シールド

4枚の花弁状のパーツが内蔵されたシールド。

中心部に対ビーム用の『Iフィールド』発生装置が取り付けられている。

デストロイモード時は花弁のパーツがX字型に展開され、Iフィールド発生装置が露出される。

キャラ紹介（後書き）

誤字脱字、感想あればお願いします。

第01話 泣き虫男性操縦者

『インフィニット・ストラトス』
省略、頭文字をとって『IS』

今、世界はこの『IS』のせいで傾いている。

男女のパワーバランスが崩れ去り、女尊男卑の世の中になっている。

それは何故か。

その理由はISの謎の一つが関係していた。

ISは”女性”にしか動かせない。

このIS、今までの兵器を凌駕する力を持っている。

たった一機で全2341発以上のミサイルの半数を迎撃できたり、
大量に投入された軍事兵器の大半を破壊することが可能。

それを知らしめたのが『白騎士事件』と呼ばれる事件だ。

そんな、強力な力を持つIS操縦者などを育成するのがIS学園だ。
基本、女子しかないが、そんな基本を覆す存在が現れた。

ISを動かせる男。

名前をアルフォンス・ラプラス。長いので愛称はアル。

本人はまだ13歳なのだが、飛び級ができるそうなので、この年で
IS学園に入学することになっている。

そんなアルは、今、窮地に立たされていた。

(こ、これは・・・やばい・・・)

一番前で真ん中の席。

右を見れば女子、左を見れば女子、後ろを振り返れないがたぶん女子。

周りは全員女子。しかも全員年上。

男でISを動かせ、異例でこのIS学園に飛び級で入学したアルは、この圧迫感を感じ、物凄いやばった。

周りの女子はもの珍しそうにアルを見ている。

当然だろう。アルが男なのだから。しかも年下の。

周りに知っている人もいなければ、親しい人もいない。

このIS学園に入れば、基本は男子との接触がない。皆無と言ってもいい。

だがそこに1人だけ男子が入ってきたのだ。珍しくないわけがない。さらにはISを動かせる。それだけでも十分珍しいだろう。

「……………ん、ラプラス君っ」

「うえ！？あ、はい！」

突然名前を呼ばれ、アルは大きな声を出しながらガタツと音を立てながら立ってしまった。少しぎこちなく、後ろからくすくすと笑う声が聞こえた。

恥ずかしさと圧迫感のせいでさらにこの空間から脱出したくなってくる。

「あ、突然大声出してごめんね。でも、今自己紹介中で、『あ』から始まってラプラス君の名前が『ア』で、ラプラス君の番だから、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「え、えっと、そんな謝らないでください。じ、自己紹介しますから、落ち着いて下さい」

「ほ、本当ですか？ほ、本当ですよ？約束ですよ。絶対ですよ！」

あわてていて、忙しそうにしている山田先生をなだめる。

さっきから何度もぺこぺこ年下のアルに頭を下げている光景はさすがにアル本人も見たくない。というかそういうのが苦手だ。

そして今度はがばっと顔をあげてアルの手をとっている。

熱心に言っている辺り、仕事熱心なのだろう。

その心はわかるが、アルにとっては少し自重してほしかった。

そう、再び視線が集まってきているのだから。

（こ、こう言うのは第一印象が大事なんだ。深呼吸して、あくまで普通に）

すーはー、と深呼吸をするアル。

第一印象がダメであればこの学園で最低1年、運が悪ければ3年間環境が悪くなり居場所がなくなるとみた。

後ろに振り向き、視線が集まることを自覚する。

こんな状況で、内気というかなんとか、意気地無しなアルは早く終わらせたかった。

「ア、アルフォンス・ラプラス、です。フ、フランスから来ました。な、長いんで『アル』って、よ、呼んでください」

がちがちで？み？みだが何とか言えた。

綺麗にお辞儀もし、第一印象としては悪くないはず。

頭をあげれば・・・全員が『他に何かないの？』的な顔で見ている。

状況的にいえば『もつというろしゃべってよ』とか『これで終わりじゃないよね？』的な空気が流れ始めていた。

はつきり言ってしまうえば、無駄に期待されている。

そんな状況で、次第にアルの目尻には涙が浮かんできた。

本当に小さく、近くの人でもよく見なければわからないものだが、今のアルは確実に、あと一步で泣きだしそうだ。

「・・・い、以上です」

スパアンツッ！！！！

突然思いつきり頭を殴られた。

「あう・・・」

頭を押さえたままその場でうずくまるアル。

威力は申し分ない。というか痛すぎる。

うずくまって涙をこらえるが、さすがに今ので確実にぼろっと涙が出た。

「挨拶もまともにできんのかお前は」

「ち、千冬さ——」

スパアンツッ！！！！

再び頭に衝撃が。たぶん出席簿で叩いてるんだろう。

「ここでは織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生・・・」

頭を押さえながら席に座る。

涙は、たぶん出てないはず。

泣いてるって言われても、泣いてないって返すつもりだ。

（あー、もうダメ。泣きそう、というか泣いてもいいかな？泣いたら弱虫ってのがばれるけど、いいよね？）

頭の中での自問自答を繰り返すアルだった。

side out

HR、さらに1時間目のISの基礎理論が終わり、休み時間。

案の定、アルの自問自答は答えが出ないで終わった。

頭の痛みはまだ抜けない。

というか、ずっと頭を押さえていたせいでまた殴られたぐらいだ。

（痛いなー、本気で殴ることないのに・・・）

やっぱり頭を押さえているアルは机に突っ伏している。

はつきり言って、IS関連は何も問題はない。

あの大天才、篠ノ之束その人に教えてもらっただから。

休み時間。

それは普通なら心を休め、次の授業に備える時間だ。

だが、今の状況は何とも言えない。

他のクラスからの女子が廊下からアルを見ている。教室でも同じ。仲のいい数人が集まってアルを見ている。そんな状況はやはりアルには耐えかねる物だった。

「えっと、あの、ラプラス君・・・でいいんだよね？」

「う・・・？」

頭を押さえていた状態から、声をかけられた。

IS学園に入ってきて、はじめて声をかけてもらえた。嬉しいと言えばうれしい。嫌ではなかった。

ちょっと変な声を出して反応してしまい、声をかけてくれた女子は、なんだか少し困惑気味。それでも話そうとしてる。

「私、織斑一夏。えっと、頭大丈夫？」

心配してるつもりなのだろうが、聞き様によってはバカにされている。

でも今のアルは心配してくれる人。優しい人が成り立っているためバカにされている、なんて微塵も思っていない。

そしてこの少女——織斑一夏と名乗っていた。

『織斑』の性を持つことから、このクラスの担任である千冬の姉妹なのだろう。顔を見てみればどこことなく似ている。

綺麗な黒髪に、千冬に似た顔。

厳しい姉の千冬とは対照的で、明るくて優しそうだ。

「な、泣いてたの・・・？」

恐る恐る聞かれた。

目尻には涙。目は少し充血してて赤い。
頬の辺りはちよっと赤くなっていた。

「な、泣いてないよ？」

意気地なしで弱虫なため、強気を装っている。

だから泣いてる、なんて言ったらますますバカにされるだろう。

一夏も、そこら辺は詮索はしない。

アルのことを考えての行動だろう。

この気遣いはアルにとって物凄くうれしかった。

「ラプラス君、千冬姉がごめんね。とうるか知り合い？」

「アル」

「え？」

「名前。名字じゃなくて『アル』って名前がある」

最初の自己紹介のときにしっかり言っていた。

名字じゃなく、『アル』と呼んでほしいと。

それを聞いて一夏は笑いながら、アルに手を出した。
アル本人はどうしたんだろうと思っている。

「私も、一夏ね。アルの学園での友達第一号だよ」

「・・・うん、よろしくー夏」

第01話 泣き虫男性操縦者（後書き）

今回はセシリアが登場！

弱虫なアル君に突っかかります！

そしてこの小説では、箒が空気と化します。

まあ、出番があるときはしっかりあります。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第02話 友のための怒り

「ちょっと、よろしくて？」

2時間目が終わり、再び休み時間。

隣の席だった一夏と話している途中、突然声をかけられた。

声をかけてきた相手は、綺麗な金髪を持った女子だった。

先生に注意されないことから地毛だろう。そこから見るにアルと同じ外国人だということがわかる。

ロールがかかったその髪は、いかにも高貴なお嬢様。

雰囲気も『まさしく』で、その女子もまたしかりだ。

しかも、ISのせいで女性が優遇されているせいか、上から目線。女性Ⅱ偉いの構図を簡単に表してるようにも見える。

「聞いてます？お返事は？」

「え、あ、はい。なんですか？」

消極的、というか引き気味なアルは丁寧口調で聞き返す。

基本、こう言うのは受け身になってしっかり答えれば何もないはずだ。

アルの返事の仕方悪くはないはず。

なのに、相手の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないのかしら？」

「え・・・」

アルは、ついでに横で聞いていた一夏もだが、この手の相手は苦手だ。

ISが使えるからIS操縦者は偉い。だから女は偉い。

確かに、ISが使えるのはいい。だがその力を振り回せば暴力となんら変わらないのだから。

「うんと、僕、君のこと知らないから、そんなこと言われても・・・」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補制にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「うん・・・」

事実、アルは世界を回ったことがあるが、『オルコット』という名にも『セシリア』という名も、これまで一度も耳にしたことがなかった。

自己紹介でいろいろ言っていたが、アルの頭はその状況から抜け出したいという思いでいっぱいだったから聞いてなかったのだろう。

一夏も名前を聞いて、あー、みたいな顔をしている。

ようやく名前を覚えてくれたことの方が代表候補制ということより印象的だったのだろうか。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じにすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実を少しは理解していただける？」

「そうですか。これはこれは、僕は運が良かったんですね。ラッキーってやつです」

「・・・バカにしていますの？」

アル本人は微塵もバカにしているつもりはない。

セシリアが幸運と言ったので、素直に喜んだだけだ。ちよつと棒読み気味に聞こえるのは気のせいだろう。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入ってこれましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていたから、少しくらいは知的さを感じさせるかと思ってましたが、期待はずれですわね。逆に幼稚なんじゃなくて？」

ぷちっ。

頭の中で何かが切れる音がした。

それは聞いていて怒りがわいてきた一夏でもなければ、他の女子でもない。

アル本人だ。

「”ISについて何も知らないくせに”？ バカにするのも大概にしてほしいな。僕は君なんかより幼稚じゃないんだからたくさん知ってるよ。なんなら教えてあげようか？」お嬢さん」

今度は受け流しても何でもない、ただの挑発。

先にバカにしてきたのはセシリアだし、東本人から直々に教えてもらっているアルに知識で勝つのは本当に難しいだろう。だがセシリアが挑発に乗ってこようとした時だった。

キンコーン、カーンコーン

ナイスタイミングでか、チャイムが鳴り響いた。

アル本人はこんな挑発をするんじゃないかと、言った後に後悔していたため、このチャイムが福音に聞こえていた。

「っ……！また来ますわ！逃げないことね！よろしくって!？」

イヤだ、と言いたかったが言う勇氣もないのでうなづく。

かつかつと足音を立ててセシリアは戻って行った。

side out

「これより、再来週行われるクラス対抗戦代表者を決める。クラス代表は、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など、まあ、クラス長とを考えてもらって構わない。自薦他薦は問わん。誰かいなか」

3時間目の授業での千冬の第一声。

その言葉を聞いて一瞬でアルは悟った。

絶対面倒だ、と。

そしてその予想は当たった。

それはなぜか。それは――――

「はいっ、アル君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「え・・・？」

「では候補者はアルフォンス・・・他にはいないか？ いなければ無投票当選だぞ」

「え、いや、僕はそんなの――――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権はない。選ばれた以上覚悟してやれ」

反論は聞かない。聞いてくれない。

1、2時間目に続き3時間目でも泣きそうだ。

だが、泣いたら泣いたでまたセシリアにバカにされるだろう。それだけは避けたかった。

聞いてもらえないだろうがもう一度反論しようとした時だった。甲高い声が、アルの言葉を遮る。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バンツと机をたたきながらセシリアが立ち上がった。

全員が振り向き、視線はセシリアに集中した。

そしてさらにセシリアは続ける。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくし

にとっては耐えがたい苦痛で——」

半分以上アルをバカにする内容でもあった。

それを聞いて、さらに怒りをあらわにする人物が一名。

先ほどのセシリアと同様に、という訳ではないが立ち上がって言い放った。

「あんた、さっきの休み時間といい、今の発言といい、アルのことバカにしすぎじゃないの！？それに、そんなこと言うんだったら自薦して自分からクラス代表になればいいじゃない！」

その人物とは一夏だった。

アルをバカにする言葉にもう堪忍袋の尾が切れたのだろう。

友達がバカにされたのは耐えきれないと言った形相でセシリアに言葉ぶつけている。

教卓の前では千冬が頭を抱えていた。

このバカが・・・、と言いたげでため息をついている。

「い、一夏！ば、僕のことはいいから、ね？」

「よくないよ！アル、自分のことバカにされるんだよ？私は黙ってられないね」

「ええ！？いや、でも」

「それに、日本のこともバカにするようなこと言ってたけど、世界一おいしくもない料理で何年覇者なんだか」

「あ」

言ってしまった。言っではならない禁句を言ってしまった。
しかも何気なくさらっと。普通に。

アルは恐る恐るセシリアの方を向くと、顔を真っ赤にしたセシリアが完璧に怒りをあらわにしている。完全にやってしまった。一夏がやってしまったのだ。

「決闘ですわ！」

「受けて立とうじゃない！」

「わざと負けたりしたら小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

「あいにくと、私はわざと負けるほど優しくないの」

勝手に話が進んでる。

アルの願いはなんでもいいから誰か助けて、だった。

だがそんな願いもむなしくこの2人の話を聞きいれる千冬。
もうアルに逃げ場はなかった。

「決まったようだな。勝負は一週間後の月曜の放課後。第3アリーナで行う。それまで織斑とオルコット、アルフォンスはそれぞれ用意をするように」

「え？ 僕も？」

「当然だ。他薦されたものに拒否権はないと言ったはずだろう？」

一瞬でアルの望みは崩された。

第02話 友のための怒り（後書き）

次回は筭が登場？（予定はたぶんだけどあり
一日目が終わってアルのルームメイトとは？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第03話 ルームメイト（前書き）

だ、ダメだ・・・。

箒を出そうとするのに、なかなか出せない。

これは、マジで空気になるかもしれない・・・。

今回はやっぱり箒は出ません。

第03話 ルームメイト

一日目の授業がすべて終わり、今は放課後。
一夏とセシリアの言い争いに巻き込まれ、少し面倒なことながらアルもセシリアと戦うことに。

そして今は休み時間と同じ状況。

他のクラス、さらには他の学年からの女子が来てさあ大変。

昔日本ではやったウーパールーパー状況だ。

学食に行くにしてもぞろぞろと付いてくる。

アルの大食漢ぶりをみて引いた者もいれば面白がる者もいた。

「あ、ラプラス君、ちょうどいいところに。寮の部屋が決まりましたよ」

「へ？」

一週間だけ学園外からの通学を言われていたのだが、何かの聞き間違いだったのだろうか。普通に疑問符を頭に浮かべる。

そんな顔をみて、ちよつとだけくすくすと笑う山田先生は、アルに部屋の番号が書かれた紙とその部屋のキーを渡す。

いまだにアルの顔は疑問な顔だった。

「あ、荷物」

「それならここにあるぞ」

突然現れた千冬に少し大きめのバッグを渡された。

というかいつからいたのだろう。瞬間移動だと思ってしまふ。
渡されたバッグにどこか見覚えがあったアルは、すぐさま中身を確認した。

着替え、愛用のゴム、IS調製用どこでもデイスプレー（束オリジナル）、純白のネックレストップ、他いろいろ。

見覚えがあるものがどっさり。
しかもめちゃくちゃお気に入りのものであったり、愛用してるものとかだった。

「とある人物からの贈り物だ。感謝しておくように」

「はい。ありがとうございます」

そのバッグを背負い、すぐさま自分の部屋へと向かったアルだった。

side out

しばらくして自室に到着。

部屋番号は1025室。確認、大丈夫、しっかりと合っている。

早速といわんばかりにドアノブに手をかける。
鍵はかかっていないようだ。

そのまま中に入り、という部屋か確認した。

「おお」

「あ、ルームメイトの人？」

「っ!？」

突然声が聞こえてきた。

ドア越しで声に曇りがあるが、確実に女子だ。

しかも、この状況は激しくやばい。

シャワー室があるから、たぶん相手はバスタオル越し間違いなしだ。

「ごめんね、先シャワー使っちゃって。私、織斑——」

「——い、一夏？」

「ア、アル？」

シャワー室から出てきたのは、今日学園での初めての友達、一夏だった。

その姿は、今しがたシャワーを使っていたためバスタオル一枚。本当にいろんな意味でぎりぎり、見えるか見えないかの瀬戸際。まさしく絶対領域というやつだ。

露出した太ももや、くびれた腰つき。

片手でバスタオルを押さえている胸など、本当にぎりぎりだ。

ぶっちゃけ、13歳のアルでも男なので刺激が強すぎた。

「ご、ごめん! み、みるつもりじゃ・・・」

「え? あ! ダ、ダメだよ! ? め、目えつぶってて! !」

顔を赤くしながら両手で目を隠し、顔を横にそらすアルに対して、

一夏も顔を赤くする。当然アルは反応と対応に困ったのだが、急いで頭をフル回転させて今の状況に至る。はつきり言ってみえたら死亡フラグだろう。

「な、なんでアルがここに？」

「ぼ、僕、この部屋って言われたから」

目を隠し、バッグで影を作ってさらにそこに隠れているアルは一夏の質問に答える。少しばかり静かなため、服を着るときにするこすれる音が聞こえて一層アルの心臓に悪かった。

「も、もういいよ」

「う、うん」

影から出てくるアルの目には着替えた一夏がいた。

一夏のかっこうは非常にラフなもの。ホットパンツに半袖。

まあ、アルは女子の寝間着など、かれこれ数回、しかも子供ものしか見たことがない（幼少時代のフランスで）

どちらにしろ、気が緩んだので何よりだった。

「あ、シャワー使ってもいい？」

「え、あ、うん。どうぞ」

一日の疲れをとりあえず落としたい。

その思いから何事もなく、普通にシャワーを浴びたかった。

アルはちよつとふらふらとした足乗りで脱衣所へ入って行った。

（10分後）

ゴムでまとめていた後ろ髪をほどき、タオルでワシワシヤと頭を搔きながら寝間着姿に着替えたアルが脱衣所から出てきた。

綺麗な琥珀と言ってもいいオレンジ色の髪の毛は、部屋の光でも反射してさらに綺麗に見える。女の子にも見えなくもない容姿は一夏の心をすごい勢いでくすぐった。

「ア、アル。髪、整えてあげよっか？」

「え？ いいの？」

「うん♪」

櫛を持って笑顔な一夏。

優しいような笑顔に、アルは頼むのだった。

「うわあ、すごいね。女の子みたいにさらさら」

「え、そう？」

「うん。たぶんお母さん譲りなんだね。すっごく可愛いと思うよ」

「そうかな？ えへへ」

髪の毛を触りながら感想を言っていく一夏の言葉に、アルは照れてきた。可愛いと言われ、嬉しくなって顔が少しニコツとしてくる。脱衣所についていた鏡でその顔を見ていた一夏も嬉しそうだ。

終わった後、ベッドの上で胡坐をかいているアルは珍しく髪の毛を

ちょっとだが弄っていた。なんだかいつもと違う感じで嬉しいのだろう。

「おお、すごい。アホ毛ができた」

「あ、あれ？」

髪の毛のてっぺん辺りにぴよこつと飛び出たアホ毛。

今までになかったため、ちょっとした違和感。

失敗したかな、と思う一夏だったが、アルはどうしてかぴよこぴよこと動かすことができ、なんだか楽しそうだった。

side out

翌日の朝。

一夏の朝はいつも早めだ。

毎朝6時前に起きる。

そして、いつもなら弁当を作ったりするのだが、今は寮で学食があるためその必要はない。だが、それでも早く起きてしまったので、落ち着かなかった。

顔を洗い、歯を磨く。

髪の毛を整え、制服に着替えても今の時間は6時30分ぐらいだ。

「はあ、何もすることないなあ。どうしょ」

そんな独り言をつぶやいている時だった。

突然アルが上半身だけをむくりとおこす。
だがなんだか目がまださめてなさそうだ。

「ふぁゝゝ、おはよ・・・」

「うん、おはよ」

目をごしごしこするしぐさが何だか可愛い。

意外に、こう言うのはいろんな人の心を打ちぬけるものだ。

そして一夏もまた、心を打ち抜かれた。

だが平常心は保っていられたので変な行動は起こしたりしないから
安心してもいい。

「んゝゝ!!よし、目が覚めた」

今度は伸びるしぐさ。

これもまた、一夏の心を打ち抜いたのだった。

第03話 ルームメイト（後書き）

平常心は保ってられる。

たぶん大丈夫だ。メインヒロインが暴走しちゃだめだもんね！w

次回はいろいろすっ飛ばして早速バトルでもいいかな？

でもその前に何か入れなければ。それに箒も出さないといけないし。

ん？待てよ。あえて箒は出さないでいいんじゃないだろうか。

あ、そしたら福音戦の前のあれが面倒なことに・・・。

とりあえず、誤字脱字、感想あればお願いします。

第04話 対抗意識（前書き）

うーん、今回も箒の出番なし。

出そうだけど出ない。しょうがない？

箒ファンのみなさん、すいません。

「5、5時間・・・です」

沈黙。アルの答えに頭を抱える千冬。

しばらくしてからアルの頭をガシッと掴む。

「？」

「まさか、ラウラとの模擬戦の後から一度も乗ってないとかいうんじゃないだろうな？」

「・・・乗ってませ————いだだだだだだ！！！！！」

突然のアイアンクロー。

あまりの激痛で必死に頭から千冬の腕を引き剥がそうとするが、無駄に食い込んでいるせいでとれない。

というか、アルの非力な腕力では到底引き剥がせないだろうが。

1分から2、3分ぐらいしてから、アルはようやく恐怖のアイアンクローから解放された。まさかISに乗ってないだけでこんなことになるとは思ってもいないだろう。

掴まれていた頭を両腕で押さえ、半分泣き目だ。

「それと織斑、お前のISは訓練機になる。構わないな？」

「え、あ、はい」

急に話の内容を切り替えられた。

専用機相手に訓練機で挑むなんて負けに行くようなもの、と思う生徒がいるが、一夏はまったく気にしていなかった。

セシリアの方をばれないようにチラッとみると、自信にあふれた顔で、胸を張っている。どこからその自信がわいてくるのだろうか。

「では、この授業はここで終了する」

side out

「専用機を持っているわたくしに訓練機で挑むなど。まあ、専用機だろうと勝負は見えてますけど」

早速席にやってきたセシリア。

お気に入りのポーズ（手を腰に当てている）でまたもや胸を張っている。

そしてやっぱり上から目線。

専用機持ちらしいので負けることは考えてないようだ。

「あっそう。でも専用機持ちが訓練機に、しかもそこまでISに乗りなれてるわけでもないこの私に負けたらどうする？結構面白いと思うんだけど」

「威勢がいいですわね。それでもわたくしの勝利はゆるぎないですわ」

なんだかこの2人の仲は以上に悪い。

まあ、敵対しているので当然と言えば当然だが、近くに来るたびにいがみ合うのはやめてほしい。アルとしては迷惑際ならないものだ。

「そして、あなたも。さすがに専用機ではないとフェアじゃありませんものね」

「・・・」

「聞いてますの!？」

「・・・」

アルに話を振ったセシリア。

だが一向に返事がない。なんでか出されているディスプレイで顔が見えないため、どうすればいいかちょっと困る。

「ん？何か言った？」

そして最終的にはこれである。

頭に装着していた束特製でオリジナルのIS調製用どこでもディスプレイを使用していて、集中していたのでセシリアの言葉は耳に入ってこなかったようだ。

この行動でさらにセシリアの神経を逆なでする。

怒りをあらわにするが、アルはどういうことかわかっていない。

頭の上に疑問符がいくつも浮かんでいる。

「あ、そろそろお昼だ。一夏、学食行こ」

「ん？ああ、そだね。じゃ、そういうことで」

ふと時計が目に入り、セシリアを綺麗にスルーして教室を出ていく。その場にはひとり残ったセシリアと静寂だけが残されていた。

side out

「ねえ、君って噂の子でしょ？」

学食につき、即座に超特盛りでラーメンを頼んでから一夏と席に着いた。

早速食べ始めようとした時だ。突然見知らぬ女子に声をかけられた。

やや外側にはねた癖毛が特徴的な女子。

リボンの色が一夏と違うため先輩だ。

1年は青、2年は黄色、3年は赤で、その先輩は赤だから3年だ。

「そうなんですか？」

返事をする、自然な動きで隣に座ってくる。

馴れ馴れしいというか、少しばかり(?)遠慮がない。

アルはこう言うのが苦手だから受け流す気満々だ。

「代表候補制の子と勝負するって聞いたんだけど、ホント？」

「えっと、はい。そうですけど」

すでにアル(と一夏)がセシリアと戦うのは噂らしい。

さすがは女子。情報の周りにはやはり男よりも数倍だ。

しかも3年までとはどのくらい速いのか気になってしまう。

「でも君、素人だよな？ISの稼働時間はどのくらい？」

「えっと、5時間と27分49秒弱です」

「こ、細かいね・・・じゃなくて、それじゃ無理だよISって稼働時間がものを言うの。その相手が代表候補制なら、軽く300時間はやってるわよ」

アルとしては何時間やればいいのかわからない。

だが確実にわかるのはこのままじゃセシリアに負けるということだけだ。

以前ドイツで一度だけ、模擬戦をしたことがあるがそれもボロ負けだった。『A I C』を使われ身動きができず、単調な動きは簡単に読まれた。

軍人に素人が勝てるほど世界は甘くないということだ。

「でさ、私が教えてあげよっか？ISについて」

食べる手を止めて、悩む。

こういう場合は非常に困る。

確かに教えてもらえるのは嬉しい。

嬉しいが、アルはこう言うのにまったくと言っていいほど慣れてない。

むしろこう言う機会に慣れておいた方がいいのだが、極力そういうのは面倒なのでやりたくなかった。

悩んだ結果、返事をしようとした時だ。

声を出す前に先に喋られてしまった。

「私が教えるんで大丈夫です」

一夏だ。先ほどから無言だったがやっと喋ってくれた。だがそんな言葉に一步も引かない先輩。(名前不明)というかアルは、一夏からは何も聞いていないよ？みたいな顔をしている。

「あなたも1年でしょ？私の方がうまく教えられると思うんだけどなあ」

「私、織斑先生の妹ですから」

「へえ、織斑先生の妹さん——って、ええ!？」

ようやくたじろいだ先輩。

まあ、誰でもあの千冬の妹と聞けば驚くだろう。

その先輩も一夏の顔をみて「そういえば似てる……」と言葉を漏らしているぐらいだ。千冬と同じ顔はいろんな意味で最強の武器かもしれない。

「なので結構です」

「そ、そう。なら仕方ないわね……」

ちょっと残念がりながら戻っていく親切だった先輩。アルはどうしたらいいかまだ困惑気味だ。

「一夏」

「ごめん。でもなんかノリって言うか、なんていうか。こう言うの

ってなんか対抗意識出ちゃうんだよね」

「ありがとう」

「え？」

つい対抗意識が出てしまった様だ。

それで千冬の（名字だが）名前を出すのはどうかと思う。

だが逆にアルは嬉しかったようだ。

小さく、ありがとう、と言ってそそくさとまた食べ始めた。
その言葉は一夏が聞きとれたかどうかかわからない。

「おかわり！」

「まだ食べるんだ・・・」

第04話 対抗意識（後書き）

今回はセシリアとの対決！

例によって例がごとく一夏の戦闘をカットするかどうか迷ってます。原作の一夏と戦い方は同じっちゃ同じだけど、違うと言えば違うかなあ。

アル君の場合、早速デストロイモードを使うか迷ってます。

デストロイにする場合、感情を高ぶらせないと（わかりやすくするなら）行けないですからね。

使ったら使ったで、一歩間違えばブルー・ティアーズの損傷が小から中、もしくは大破になるかも？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第05話 クラス代表決定戦 前編（前書き）

今回はクラス代表決定戦。

前編なので今回はセシリアVS一夏です。

ちよっと省いてる部分がありますが、問題はないかと。

第05話 クラス代表決定戦 前編

翌週月曜日。

セシリアとの対決当日。

「ねえ、一夏」

「・・・な、何？」

「僕、一夏に教えてもらうはずだったよね？」

「う、うん」

当日までの一週間。

一夏が3年生の先輩に対抗意識を出したため、結局は一夏自身がアルにISについて教えることになった。

だが少しばかり問題が解決されていない。

「僕、逆に教えてた気がするんだけど、気のせいじゃないよね？」

「・・・」

「あ、目え逸らした」

アルの頭脳は劣化版束のようなもの。

ぶっちゃけ、知識で勝つのは無理に等しい。

最終的には何も訓練などの体力付けなどはせず、アルがみっちり細かいところまで解説、説明するに至る。

「確かに、一夏より僕の方が頭がいいのはわかるよ。飛び級だし。でも、一夏が教えてくれるって言うてくれたから、僕期待してたのに」

「しょ、しょうがないよ。ほ、ほら、知識だけでも、備えあれば憂いなしって言うじゃん」

「それでも僕には何も教えてくれなかったよね」

「・・・」

「あ、また目え逸らした」

結論から言うと、一夏は何もしていない。

アルにはわかりまかせつきりで、教えることができなかった。

アルは一夏は運動ができそうだ、訓練機でも使ってISの訓練をするんじゃないのかと思っていたのに、期待を大いに裏切られた。本当にセシリアに勝てるのだろうか。

「あ、そうだ。一夏、はい」

「え？何これ？」

今さっき思い出したように、ポケットから何かをとりだす。

先に一夏がセシリアと戦う気だったので、すでにISスーツを着た一夏に渡すが、何が何だかわかっていない。

「え、えっと、その、い、一夏の専用機・・・(ぼそ」

「え？今、なんて？」

「一夏の専用機！束姉から送られてきたの！」

「ええ！？」

怒られると思い、小さくぼそつと発言。

聞こえなかったか、聞き直すが聞き方がいけなかったのだろう。

少しむすつとしたアルは大きな声で返し、それと同じぐらいの声で一夏も驚いた。

アルが渡したのは白い腕輪。

真っ白で、それ以外の何物でもない。

名を『白式』一夏のために束が作った専用機だ。

「ということですけど、どうすれば？」

『なんでもいい、早く準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているんだ。フォーマライズとフィッティングは実戦でやれ』

「え？マジですか？」

「機体名は『白式』^{びやくしき}。僕も一夏の戦闘を見たいけど、一角の調整があるし、見たら対策取れちゃうから見ないよ。でも、応援してるから、頑張ってるね」

近くにより、白式を付けた手に手をかける。

その瞬間、ちよつとだけドキッとしたのは一夏だけの秘密だ。

アルの見上げる顔、上目使いが可愛いと思ったのがこれが初めてだろう。

「うう・・・（ちらっ）・・・ああ、もう！白式！！」

一瞬千冬を見てから何かを諦め、一夏は白式の待機状態を付けた右手を掲げながら、高らかに叫んだ。そこにあった一夏の展開した専用機はまさしく白そのものだった。

side out

「あら、逃げずに来ましたのね。専用機を持っていたのですか」

ふふんっと鼻を鳴らし、お気に入りのポーズをとっている。

だが一夏はそんなのはお構いなしで関心などなしだ。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』

自分の背丈よりも大きな銃『スターライトmk?』と、特徴的なフィン・アーマーが背中に4枚。例えるならどこかの国の王国騎士だ。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたく、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

目を笑みに細めるセシリア。

余裕なのか、砲口は下がったままだ。

——警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行——
——セーフティロックの解除を確認——

ISが告げる情報を見てから、再度セシリアを見る。
左目だけを射撃モードに出来る辺りを見るとさすが代表候補生だと思える。

「そういうのって、チャンスとは言わないと思うんだけど。例えばチャンスだとしてももらえない」

「そう？残念ですわ。それなら——」

——警告——

——敵IS射撃体勢に移行——

「————お別れですわね！」

「っ!？」

キュインッッ!!

耳をつんざく音が聞こえ、それと同時に閃光が一夏の体を打ち抜く。

「いつつ・・・こりゃ、久しぶりに派手な運動になりそうだなあ」

白式の反応についていけない一夏。

弾雨のごとく攻撃がどんどん降り注ぐ。

的確に狙ってくるそれは、慣れていない一夏ではよけることはおろか、凌ぐことすら難しい。どんどん削られていくシールドエネルギーに反応して、白式からのアラートが鳴り響き、うるさくて仕方な

い。

「装備は・・・」

——接近ブレード『名称未設定』——

一覧だけ映し出される。

だが素手で戦うよりは武器があった方がいい。

「これしかないなら、これで行ってやるわよ！」

加速しながら、片手に『刀』を持ち、セシリアへ突撃。
だが届かない。近づいて切らせてくれない。

何度繰り返しでも弾幕はやむことはなく、一夏を近づかせることを拒んだ。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でここまで耐えたのはあなたが初めてですわ」

「そりゃどうも」

ここまでで実に27分弱。

一夏のシールドエネルギーは100を切っていた。

「では、ファイナレとまいりましょう！」

笑みとともに右手をかざす。

命令を受けたビットが全機、多角的な直線機動で接近してくる。

そんなのあり！？と言わんばかりに驚いている一夏をお構いなしで、

ビットは攻撃を開始する。上下に回ったビットの先端が発光、レーザーを放つ。

それらすべてをかううじて防御と回避に成功した。
だがそのすきを突き、セシリアがライフルで狙ってくる。

「左足、いただきますわ!」

とどめの一撃。

確実に喰らえばエネルギーは0になり負けだ。

だが、はいそうですかと終われる一夏じゃない。

「はああああ!!!!」

無理やりな加速でいっきに間合いを詰める。

セシリアめがけて思いっきり刀を振り抜く。

当然のごとく回避されてたが、そのおかげでとどめの一撃はこなかった。

すぐさま体制を立て直してから再び距離をとるセシリア。

今度は左手をかざし、それまで周囲で待機していたビットは一夏へ向かって飛んでいく。

(ん? ああ、そういうこと。オッケー、もうわかった)

穿たれるレーザーをかわし、その内のビット1機に向かって一閃。
さらに加速してもう1機にも一撃。

重い金属を切った感触が手に伝わり、それらは次の瞬間爆発した。

「なっ!」

「わかった。あんたはこの兵器を使うとき、それ以外の行動ができない。しかも毎回命令を送らないといけないみたいね」

「っ・・・」

無言は肯定の証。凶星の様だ。

セシリアは一夏の反応が一番遠い角度を毎回狙っている。

ならば簡単だ。誘導できるのだから、誘導して待ち伏せしてやればよい。

それでもビットで攻撃してくるセシリアに対し、一夏はいとも簡単に、素早く残りの2機をたたき切って破壊した。

「距離を詰めれば!!」

「————かかりましたわ」

「っ!?!」

「4機だけではありませんわよ!」

突如、スカート状のアーマーの突起が外れ、動いた。

これは回避ができない。しかもレーザーじゃない。誘導弾、すなわちミサイルだ。

ドガアアアアアンツツ!!!!!!!!!!

赤を超えて白。

その爆発と光に一夏は飲まれた。

第05話 クラス代表決定戦 前編（後書き）

今回は一夏がファーストシフトを終わらせたあたりから。
そしてその後にセシリアVSアル君です。

デストロイモードを使うかはまだ迷ってます。

まあ、使うとなったあかつきにはセシリアをアル君（二角）がフル
ボッコにしますよw

誤字脱字、感想あればお願いします。

第06話 クラス代表決定戦 中編（前書き）

ついに10000PV突破！

これからもがんばっていききたいと思います！

第06話 クラス代表決定戦 中編

——フォーマットとフィッティング終了しました——
——確認ボタンを押してください——

「???」

爆発が起きたと思い、一夏は負けを覚悟していた。
なのにまだ負けていない。エネルギーが残っている。

目の前に映し出されたディスプレイには『確認』と書かれたボタンがある。それを押すと、膨大なデータが現れ、整理され始めた。
そして次の瞬間、白式に変化が現れた。

一夏の全身を包んでいるISが光の粒子に弾けて消え、そして再び形をなした。

新しく形成された装甲はまだぼんやりと光を放っている。

先ほどの実体ダメージは消え、洗練された形に変化していた。

「ま、まさか、ファーストシフト!? 今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの!？」

「んー、そうみたい。あ、そういえばフォーマットとフィッティングは実戦でやれて言われてたっけ」

ようやく一夏の専用機になった白式は滑らかな曲線とシャープなラインが入り、どこか中世の鎧のようなデザインへと変わっている。
その手に握る『刀』にも名が付き、接近特化ブレード『雪片式型』へ変化していた。

その名は姉の千冬が使っていた刀の名。

姉妹で同じ名の武器を持ち、姿も似ている。

ISの形は違えど、現役時代の映し身の様だ。

「私は世界で最高の姉さんを持った妹ね。これでようやく、私も家族を、誰かを守れる」

「・・・は？あなた、何を言っ——」

「まずは千冬姉の名前を守る！妹が出来じゃ、格好つかないもんね」

元日本代表の妹。

それが不出来じゃ、本当に格好がつかない。

大好きな千冬が格好つかないなんて、冗談じゃなく笑えない。むしろ笑われる。

「さっきから独り言を。もう、面倒ですわ！」

弾頭を装填したビットが2機、セシリアの命令で飛んでいく。

また多角的な直線機動で、射撃型ビットよりも速いが一夏には見えただ。

それに、手に握っている雪片の使い方も、なんとなくだがわかっている。

ブレードが開き、エネルギーの刃が現れる。

そしてそのまま横に一閃。切り捨てられたビットはそのまま爆ぜた。

「はあああああっ！！！」

いける！

そう確信し、雪片をさらに強く握りこむ。

エネルギーの密度が増していくのがわかる。

セシリアの懷に飛び込み、一気に切りかかろうとした時だ。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

「「え？」」

side out

「よくもまあ、持ち上げては裏切ってくれたな。この大馬鹿者が」

結果は一夏の負け。

原因は白式の単一仕様能力『零落白夜』のせいだ。

バリア無効化攻撃と呼ばれ、シールドエネルギーを消費して攻撃に転じる、まさしくもろ刃の剣。

使いどころは悪いわけではなかったのだが、序盤でエネルギーを削られすぎたのが原因でもあるのかもしれない。
どちらにせよ一夏の負けは決定なのだ。

「アルフォンス、準備はできたか？」

「も、もう少し。後ちょっとだけ」

「早くしろ。オルコットはすでに再出撃したぞ」

「で、出来ました！え、えっと、一角！」

おろおろしながらネックレストップを握りながら呼ぶ。

展開したISは一夏と同様に白。

ヘッドギアに一本角がついた機体『一角・零式』

白式よりも明るく、バックパック意外が純白白亜で全身装甲。

右手には威力絶大のビームマグナム。左手にはシールドを装備し、今のところはセシリアのブルー・ティアーズ同様中距離射撃型に見える。

「一夏の戦闘は見てないけど、結果だけは聞いたから。僕が戻ってきたら2人で反省会しよ」

「うえ？ああ、うん」

「じゃ、行ってきます」

ピットから一夏同様に出ていくアル。

空にはすでに、先ほど負けそうになって不機嫌になっているセシリアがいた。

だがそれでもアルは年下だから余裕そうにしている。
どうせ男なんて弱い、と思っているんだろう。

「あなたにも、チャンスをあげますわ」

「（Eパックの残数確認OK。15発ちゃんとある）」

「・・・聞いてますの!？」

「え?なに？」

ぷっちんっ。

試合がすでに始まっていたため、セシリアがいきなり攻撃を仕掛けてくる。

ビックリしたアルは、まずよけることをせずにシールドで受け止めた。

中心部に内蔵されている『Iフィールド発生装置』が機能し、レーザーはアルには届くことはなかった。

「っ!？」

「ビ、ビックリしたあ!ふ、不意打ちはんたい!!！」

「あなた!わたくしをバカにするのも大概にしないと本当に怒りますわよ!」

「バカにした覚えもないし、もう怒ってるじゃん・・・」

セシリアはビシッとアルを指さしながら怒りをあらわにしている。怒るといいながらもうすでに怒っている上に、アル本人はバカにしたつもりはない。ただ聞いてなかったりしているだけだ。

だがそんなのお構いなしでセシリアは攻撃を再開してくる。

一夏の時と同様に弾雨のごとく的確に狙いを定めてアルを狙い撃ちにしているが、全部ガードされ、中々エネルギーを削れないでいた。

「とりあえず、下手な鉄砲数うちや当たるで行ってみようか」

ビームマグナムを構え、何の躊躇もなくトリガーを引いた。
セシリアの『スターライトmk?』とは違う音を出しながらカート
リッジを一つはきだした。

ビームはセシリアを掠めた。

千冬や山田先生は、悪くはないと思っているが、驚くことが一つあった。

「な、掠めただけで4割も削られた!？」

驚異的なビームマグナムの威力は計り知れない。

掠めただけで4割も削れるのなら直撃なら一発で終わりだ。

撃ったアルも驚いている。

ドイツでの模擬戦のときは使う前にたたき落とされたのだから。

威力の強さと使い勝手を覚えるが、今まともに使えるのはこれだけ。
防御をしながら撃っても当たらなければ意味がない。

それを確信し、移動しながら狙い撃つ戦法をとった。

(あ、これ・・・知ってる? いや、覚えてる)

攻撃を避けるため、無意識にとった動きは知っていた。

否、体が覚えていた。幼いころの記憶が同時によみがえってくる。

兄と姉、自分を合わせた3人と遊んでいる時に、よく兄から教えてもらっていた。どうして教えてくれたかわからなかったが、祖尾の動きは何度もやったから体に染みついた。

頭が覚えていなくとも、体が覚えている。
セシリアの攻撃はいとも簡単によけられる。

「これなら・・・こんな弱い僕でも、誰かを守れる！」

どこからわくのかわからない、強い力。

その力を、意思を宿したアルの瞳はまっすぐだ。

つい先週みたおどおどした姿が想像できない。

「あなたも独り言ですか！」

一瞬のすきを突き、ライフルでアルを狙い撃ちにする。
見事直撃し、大幅にエネルギーを削りながらアルを地面にたたき落とした。

さらに追い打ちといわんばかりにビットを4機飛ばす。

体制を立て直しているアルにこれは避けられない。

そして何もできないままレーザーが放たれた時だ。

「!？」

放たれたレーザーはすべて弧を描き、アルの周りを沿るように曲げられた。

それはアルが何かしたからじゃない。”一角が”何かしたのだ。

赤い光がアルを、一角を包む。

白い展開はところどころが割れ、内側の装甲をむき出しにする。

脚から腕、胴、バックアパック、そしてヘッドギア。

一角の姿が変形、いや変身した。

一回り大きくなり、姿がまるで違う。

開いた装甲の内側の装甲は赤く発光し、ヘッドギアの一本角は二つに割れた。

背中のバックパックも開き、2つのバーニアが4つに、さらにビームサーベルが2基展開される。

「・・・」

急に黙り込んだアルは、シールドとマグナムを投げ捨てる。

もはや生身で、当てればすぐ終わりなのにセシリアは何もできない。アルはゆっくりと右手を背中のサーベルに手を伸ばし、展開させる。そして一瞬だけ構え、加速しながらセシリアに突撃した。

第06話 クラス代表決定戦 中編（後書き）

はい、次回はセシリアフルボッコのターンです（笑）

ちなみに、アル君の家族。前作は兄だけだったんですが姉を追加しました。

後の話（オリジナル展開）にかかわって来ます。

まあ、アルのISがユニコーンと言ったら、お姉ちゃんのISはもうわかりますよね？緑色のあれですよ？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第07話 クラス代表決定戦 後篇（前書き）

今回でクラス代表決定戦は終了です。

いやゝ、なんか地味に長かった。

初戦闘でデストロイ（意識なし）はやっぱ良いですね。
書いてて楽しかったです。

第07話 クラス代表決定戦 後篇

「ラプラス君すごいですね。本当にI Sの稼働時間が5時間半ですか？」

戦闘映像を見る山田先生の感想。

アルの動きは確実に稼働時間が5時間で習得できるものではなかった。

射撃は初心者だというのはわかる。

だがあの動きは千冬でも驚いていた。

「どうした、一夏」

「ああ、千冬姉。一角の装甲見てみてよ。赤いラインが入ってない？」

一夏に言われ、一角の装甲に注目する千冬。

確かに言われてみれば、薄くだが赤いラインが入っている。

何故だか疑問に思うが、わからない。

「あ！」

そんなことを考えていると、アルはいつの間にかセシリアと距離を離れて地面にいた。すぐに直撃したんだとわかる。

体制を立て直している時、ビットが4機周りに着き、一斉掃射された。その時だ。

「「！？」」

ビームがすべてアルの周りを沿うように弧を描き、曲がる。
それだけではない。

赤い光が一角を包み、先ほど入っていた赤いラインが開いた。
脚、腕、胴、バックパック、ヘッドギア、すべてが開いて行く。

内側のむき出しになった装甲は赤く発光し、赤いラインはそれが原因だと分かった。

姿かたち、すべてが変わり変身した一角。

さながらファーストシフトが終了したように思えるが、違う。

「な、なに、これ・・・？」

「IS・・・なのか？」

一夏も千冬も困惑している。

ISなのかわからないでいるが、これは間違いなくあの大天才篠ノ之束が作ったISだ。

そんなことを考えている一夏たちには構わず、アルはその場でシールドとマグナムを投げ捨てて背中サーベルを抜いた。

「アルフォンス、お前は本当に何者なんだ？」

side out

驚異的な加速性能を引き出し、一気にセシリアまで距離を詰める。

近づかせないよう、弾幕を張ろうとビットが目の前に現れるが、横に一閃。一度に2機も真っ二つ、しかも縦に斬った。

距離を縮めてきた所を、一夏と同じように今度は大量のミサイルで落とそうとする。だがその考えが甘かった。

大量のミサイルの内1つを切り裂き、爆発させる。

そしてその爆発に連鎖し、他のミサイルはすべて意味をなさなくなつた。

「・・・」

「っ!？」

無言のアルの瞳は、セシリアをにらむ。

その眼は先ほどの力強いものではなく、冷徹で残酷な、敵を倒すためだけの冷たい軍人の様な眼だった。

一気に距離を詰められ、右手を振りかぶるアル。

危険を察知したセシリアはすぐさま近接用の武器『インターセプター』をコールし、ギリギリのところでサーベルを受け止めた。

バチィツッ!!

切りつけようとしては離れ、また切りつける。

ビームサーベルを何度も受け止め過ぎたインターセプターの実体をもった刃はもうすでにボロボロだ。

「ハア、ハア・・・な、なんですの。あの加速は・・・!!」

肩で息をし、荒い呼吸になるセシリア。

右手で逆手持ちにしたボロボロのインターセプターは、後一撃耐えられたらいい方だろう。

そして再び加速して接近してくるアル。

残り2機のビットとミサイルビットを飛ばし、接近を阻むが、レーザーを撃つ前に両機とも切り落とさ、ミサイルビットも破壊された。減速せず、勢いに任せたままアルはサーベルをふるう。

耐えられるかどうかともわからないインターセプターで受け止めようと構えた時だった。

突然アルの姿が消えた。否、見失うほど速い加速をした。後ろに姿をとらえたが、一気に切りぬきをされる。

だが何の変化もない。変化があるとしたら少しエネルギーを削られたぐらいだ。だが次の瞬間、嫌な音が連続して聞こえた。

バチバチツ・・・

・・・ガシャンツツ・・・

「?」

右手から音が聞こえると思い、ふと目をやる。

そこには手首から先がないブルー・ティアーズの左手があった。

そして自分の真下にはインターセプターを持った右手首。

アルは何もしなかったんじゃない。右手首を邪魔なインターセプターごと切り落としたのだ。

「な!？」

基本ISの腕部分に人の手は奥まで入らない。せいぜい短くても手首少し前辺りだろう。

そこから考えると手首部分は切り落としても人体に何の支障もない。脚も同様。ISの脚部のひざ部分までなら切断しても大丈夫だ。まあ、戦闘では十分大丈夫ではないのだが。

だが問題はそこじゃない。

本当の問題は、ISの本体破損だ。

通常、手持ち武器や両肩などに浮いている装備は破壊可能だ。

だが本体はISの絶対防御で守られているため破壊は不可能なはず。絶対防御は絶対にカットできないシステムになっている。

つまり、アルは相手のISの絶対防御をカットしているのだ。

「こ、こんなの、無効ですわ!」

セシリアの叫びはアルに届いていない。

今度は左手で持っていたライフルを横に一刀両断され爆発する。

そしてそのまま本来の目標であるセシリア自身に斬りかかろうとした時だ。

『試合終了。勝者———アルフォンス・ラプラス』

放送が鳴り響いた。

状況的にはいいタイミングだ。

使える武器もない状況でいたぶるのは良くない。

だがアルはやめようとはしない。

先ほどの状態からまたセシリアに攻撃を仕掛けようとしてくる。

驚くセシリアに構わずサーベルを振りかざす。

間一髪のところ回避に成功したセシリアは、急いでピットまで戻り、ISを解除する。すると予想は的中。敵がいなくなり、アルは動きを止めた。

赤く発光していた内部装甲は色を失い灰色に戻る。

開いた外装が徐々に閉じていき、最終的にはヘッドギアの一本角が閉じると同時に、強制的にISが解除された。

「!？」

ISを解除するのは別に良い。

だが場所が問題だ。アルが解除した場所はるか上空。落ちれば死は免れないだろう。

「おっと、あつぶなかった」

上空から頭から落ちていくアルを何かが受け止める。

それは、先ほど自分が戦っていた相手、一夏だ。

急いで白式を展開させ、ピットから飛んできたのだ。

「・・・」

「気絶しちゃってるみたい・・・なんで？」

『なんでもいい。心配だと思うなら早く戻って保健室に連れて行ってやれ』

「は、はい！」

第07話 クラス代表決定戦 後篇（後書き）

はい、セシリアフルボッコのターンでしたw
あれですね。ISって手とか足とか長いですからね。
手首の切断とかはもはや自己解釈です。

次回はアル君が目を覚ましたあたりから。
その後にクラス代表決定パーティかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第08話 クラス代表就任パーティ

「あ、起きた？」

夕方だいたい5時過ぎ。

セシリアとの試合で気絶してしまったアルがようやく目を覚ました。

寝ぼけながらも、ここがどこだか確認する。

目の前には一夏と知らない天井。

ベッドに寝ているということ考えると保健室だと確信した。

「大丈夫？」

「ずっと寝てたの？ 僕」

「うん。かれこれ・・・2時間ぐらい？」

「そ・・・」

何も覚えていない。

途中からの記憶がかけらもない。

いや、思い出したくない。

どうしてあんなことになったのかもわからない。

一角にあんなシステムが組み込まれていたなんて、束から聞いたこともなかったし、現に調整をしているも見当たらなかった。

ビームサーベル一本であそこまでできる物なのか。

ビット6機をすべて両断、ライフルを横に一閃、武器を持った右手

首を武器ごと切り落とす。どうやって相手の絶対防御をカットしたかもわからない。

「おなか減ってきたな・・・」

「じゃ、食堂行こ。確か、今アルのクラス代表就任記念パーティーの準備してるはずだから」

「？ あ、そっか。僕、あんな形でもセシリアに勝っちゃったんだっけ」

ちょっと落ち込み気味のアル。

そんなアルを見かねた一夏は、アルの頭をなでた。

突然のことに少し驚くが、抵抗はしない。
なんだか懐かしい感じがしたのだ。

「さ、行こ」

「・・・うん！」

side out

『アル君、クラス代表決定おめでとう！』

食堂に着くや否や、突然のクラッカーで驚くアル。
何かの癖か、一夏の後ろに隠れてしまった。

そんなアルをまた慰める一夏。

みんなそれを見て笑顔になりながら、アル君可愛い、などと思っているのだろう。

「いやー、これでクラス代表戦も盛り上がるねー」

「ほんとほんと」

「ラッキーだね、同じクラスになれて」

人が多い気がするのはいのせいではない。

相づちをうっているのはたぶん2組の生徒だろう。

なんで2組がいるのかは気にしてはいけないのかもしれない。

「あ、セシリア」

奥の方に座っているセシリアを見つけ、声をかける。

一応反応してくれたようで、立ちあがってこちらまで来てくれた。

喋ろうとするセシリアに、アルは先に喋りだして遮る。

前のセシリアならこれだけで怒りだしていただろう

だが今回は怒りを見せない。なぜなら――――

（上目使いなんて、卑怯ですわ！ しかも泣き目なんて！）

そう。アルは目尻にちよつとだけ涙を浮かべてセシリアを見上げていた。

こんな状況で大きな声なんて出せないし、ましてや怒りを見せるなんてもってのほかだ。まあ、もともとそんなつもりはないが。

「僕がセシリアのIS大破させちゃったし、試合終わったのに襲いかかったりしたし、謝ろうと思うんだ。ごめんね」

「い、いえ、わたくしも大人気なかったですわ。余裕を見せて見くびっていたから、アの結果はしょうがないことです。ブルー・ティアーズはもう予備パーツで修理済みですの」

「本当にごめんね」

最終的にはセシリアの手を握るアル。

何というか、物凄く可愛い。冗談抜きで本当だ。

男の娘の若干の泣き顔はいろんな意味で最強の武器かもしれない。

「はいはい、新聞部です。話題の新生アルフォンス・ラプラス君ことアル君に特別インタビューに来ました〜!」

セシリアとの仲直りも経て新聞部の生徒が登場。

みんな、オー、と驚いている。アルとしては迷惑だが。

「あ、私は二年生の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

「あ、ご丁寧にも——って画数多っ!」

「良く言われる。では気を取り直してアル君! クラス代表になった感想をどうぞ!」

ボイスレコーダーを取り出し、無邪気な子供のように瞳をキラキラ輝かせている薫子。こう言うのは本当に慣れていないのでアルは困惑気味だ。

「えっと・・・頑張りたいと思います」

「えー、もっといういいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか」

「ええっ!?! うーん・・・じゃあ、僕がクラス代表になったkらは絶対に優勝に導く! とか?」

「あ、じゃ、それでいいや。ダメそうだったら適当にねつ造しとくし」

それでいいのか新聞部副部長。

ねつ造なんてしたって何の得にもならない。特にアルが。

まあ、新聞部自体は何かの得になるのだろうか、本当にやめてほしい限りだ。

「じゃ、写真撮ろうか。ほら、セシリアちゃんと並んで並んで」

「え、ええ・・・」

「注目の専用機持ちだからね。あ、そういえばもう一人いるんだよね? 確か織斑先生の妹さん! その子も一緒に!」

「え、あ、はい」

「あ、名前教えて」

「織斑一夏です」

「一夏ちゃんね。よし、覚えたわ。さあ、3人とも早く並んで」

アルを挟んで左に一夏、右になぜかちょっと残念がついているセシリアが並ぶ。なんだかでこぼこしていて見栄えが悪いかもしれないが気にしてはいけない。

アルは作り笑顔が作れなくて大変そうだ。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え!？」

「え、えっと・・・」

「74・375」

「「速っ!」」

パシャツツ

突然の黛の問題に答えられないであわてる2人と、何の迷いもなく言われた瞬間に正確な答えを言い放つアル。

そしてその状態のままシャッターが切られた。

だがそんな一瞬で、1組メンバーが驚くべき行動力を持ってして撮影の瞬間に割り込んできた。無駄にすごいとしか言えない。

「何故全員入ってますの!」

「まーまー」

「セシリアと一夏だけずるいじゃん」

「3人だけじゃなく、クラス皆の思い出にしようよ」

言い訳、もとい説得。

結構な正論を言っているのでセシリアは返せない。

一夏は別に気にしてない。むしろセシリアとアルのツーショットを防げただけで十分満足だ。

「ふ、あゝゝ、眠い・・・」

この『アル君クラス代表就任パーティ』は夜10時まで続いた。

10時を前にしてアルが寝てしまったのは言うまでもない。

こう言うときの女子のエネルギーは侮れないと再確認したアルだった。

第08話 クラス代表就任パーティ（後書き）

次回からクラス代表戦！

鈴が転校してきますね。

というか本当にどんなタイミングで箒を出そうw

一応クラスの人などは知りあってる状態なので、いつでも出せる
っちゃ出せるんですけど、どうもうまくいかなくて・・・。

一夏の付き添いみたいな感じで出せばいいのかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第09話 転校生（中国）（前書き）

こ、今回こそ筈を！

という訳でちょびつとだけど出ます（え

まあ、紅椿が出るまでは基本空気ですよ。
もうそれは確定事項なのかもしれない。

第09話 転校生（中国）

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。オルコット、織斑、アルフォンス。ためしに飛んでみせろ」

クラス代表が決定し、ひと段落したころ。

鬼教官こと千冬のIS実習の授業。

開始早々の指名だ。専用機持ちの運命だろうか。

呼ばれたセシリアは即座に展開。

アルも数回程度だが展開したことがあるのでその次に展開。だが一夏は3回目なので中々展開できないでいた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

「うう・・・集中・・・」

せかされて右手の白い腕輪に意識を集中させる。

ISは一度フィッティングを終了させるとアクセサリーの状態になって待機している。ちなみに一夏の白式が最初から腕輪の状態なのは、束が一夏のデータ（簡易的な）を入れておいたからだ。

なのでセシリアの場合は左耳のイヤークラス、アルの場合は純白のネックレストップということになる。

「白式！」

中々展開できないので最終手段。

ISを展開するときは機体名を、武装を展開するときは武装名をコールすることで簡単に展開できる。

教科書の頭の方にも書かれていて、別名『初心者方法』とも呼ばれるらしい。

それにより一夏は白式の展開に成功。

白いISを身にまとった一夏は、ようやく出来た、と一安心している。

「よし、飛べ」

言われて行動が速いのはいいことだ。

急上昇し、頭のはるか上にいるセシリア。

それに遅れてアルと一夏が続く。

『遅い。スペック上の出力では一番が一角、その次に白式が上なんだぞ』

一番前をセシリアが、やはりその後をアルと一夏が続く。

さすがにそんなことを言われても候補生と数回程度しか展開させた生徒と一緒にしないでほしい。

アルの場合、自分でどうやっていたかも覚えていないのに。

「遅いって言われてもなあ・・・」

「しょうがないよね」

一夏とアルは少し愚痴っている。

まあ、それは本当にどうしようもない。

『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で飛ぶらしいが、理屈じゃどうにもできない。もはや感覚の域だ。

『よし、次は急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上から10cm』

「了解です。では、お先に”アルさん”」

「ん？ うん」

ちよつと何か違和感を感じたか一瞬疑問に思った。

気がつくときセシリアはすでに急降下中で地上すれすれで停止している。

目標の高さで出来たかどうかわからないが、さすが候補生といったところだろう。

「じゃ、今度は僕が」

上空から一気に急降下。

スペック上一番出力が高いので降下する速度も半端じゃない。

意外にこのまま隕石のように落ちるってパターンがあるかもしれないが、さすがにそんなへまはしない。

というか、これもどうしてか体が覚えていた。

頭から降下し、地上前で一回転。

脚を下に向けてバックパックのバーニアで停止。

地上から9cmとギリギリで惜しいが、意外にセシリアよりも良かったらしい。（セシリアは地上から7cm）

「あ、これはやばいんじゃないかな？」

空を見ていると一夏が落ちてきていた。そう、隕石のごとく。

ものすごいスピードで落ちてきている。まさに流星のようだ。

だがそんなことを考えている場合じゃない。

このままだと直撃する。アルとグラウンドに。

しかし、そんな中でもアルはしっかり考えている。

すぐさま一夏がそれを実行してくるかどうかで変わってくるが、言わないことには変わらないのでとりあえず指示する。

「一夏、ISを解除して!」

『ええ!? 何で!?!』

「いいから!」

『わ、わかった!』

空中の後十数メートルほどで地上に落ちそうな所でISを解除する一夏。

疑問に思うクラスメイトと千冬に山田先生。

だがそんなのお構いなしでアルは一夏の方へ飛んだ。

空中で一夏を受け止め、グラウンド直撃を免れる。

当の本人は目尻に涙を浮かべていて、本当に怖かったようだ。

「大丈夫? 怪我とかない? 頭くらくらするゝとか、そういうのもない?」

「だ、大丈夫だよ。ありがとう」

俗に言うお姫様だっこ（無意識）の状態。

すぐに地上に降りたため一夏はすぐアルの手の中から出た。

「まったく、無茶をするなバカども」

「す、すいません・・・」

「ごめんなさい・・・」

千冬に怒られるのは毎回のごとく当然の様だ。

side out

「2組に転校生？」

翌日の朝。

クラスで話題になっていたことを聞いた。

先ほど言った通り、2組に転校生が来たようだ。

今はまだ4月なのに急なことで話題になるのはわかる。

だが何故この時期なのだろうと疑問だった。

「別にこのクラスに転入してくるわけじゃないんだ。騒ぐほどではないだろう」

「まあまあ、こう言うのって結構気になるじゃん。実際箒ちゃんも気になるんですよ?」

「・・・ま、少しな」

横では一夏と箒が会話中。

当初、アルは『篠ノ之さん』と呼んでいたが、話していて仲良くなり、束の妹ということもあって今の呼び方になったようで、一夏の幼馴染で親友らしい。

それと意外に空気なのは気にしてはいけないのだろう。
本人も気にしているらしいので言っではいけない。

「なんでも、中国の代表候補生なんだって」

「中国かぁ。中華がおいしいよね」

食べ物大好きなアルは基本そういう風に考える。
どこかの国⇨その国のおいしいもの。

ちなみに中華はアルの大好物でもある。

一番は麺類で坦々麺。それとチンジャオロース。

「わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「いや、たぶんアル君がいるからだと思うよ」

代表候補生といえバセシリア。

クラスメイトに何の遠慮もなく突っ込みを入れられる辺りを見ると
もはや普通の生徒だ。代表候補生なんて関係ない。
すでにお決まりのお気に入りポーズをしている。

「それとその転校生と2組のクラス代表が交換になったんだって」

「へえ。勝てるかなあ・・・」

「今のところ専用機を持ってるのって1組と4組だけだから余裕だよ」

現在クラス代表で専用機を持っているのは1組と4組だけ。

まあ、1組には3人も専用機持ちがいるので、違う意味では当然専用機持ちが代表になるだろう。4組の生徒は少しどんまいと言える。こう言うのは半分押し付けになってしまうからだ。

やいやいと盛り上がっているクラスメイト。

そろそろSHRの時間なので人が多くなってきたからだろう。

そんな事を考えている時だった。

「その情報、古いよ」

入口あたりから声が聞こえる。

その声に全員が視線を向けた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

少し小柄なツインテールの少女。

改造OKな制服を少しばかり改造している。

片手を腰に当て、ちよつと勝気そうで八重歯が見えている少女をア
ルは知っていた。

「ま、まさか・・・鈴ちゃん？」

「そう、中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

少女の名は凰鈴音。

自分で言っていたように中国代表候補生だ。

一夏も知っているようでアルはちよつとびっくりだ。

「鈴姉、かっこつけてるのはいいけど、全然似合っていないよ・・・」

「んなっ!? あんた、毎回毎回会うことになるんで小馬鹿にしてくるのよ!」

「小馬鹿にしてるつもりなんてないよ・・・ただ、今の方が鈴姉らしいから・・・あ」

「おい」

「何よ!？」

バシンッ!

聞き返した相手は鬼教官。

そして例によって例がごとく出席簿アタック。

「もうSHRの時間だぞ。教室に戻れ」

「ち、千冬さ——」

バシィッ!!

さっきよりも強烈そう、否、強烈な一撃。

鈴は痛みに頭を押さえている。

「織斑先生と呼べ。そしてさっさと戻れ。入り口をふさぐな。邪魔

だ。どけ」

「す、すみません・・・」

痛みをこらえながらちよつと泣き目で入口からどく鈴。
完璧に、100%千冬に対してビビっている。

「また後で来るからね！逃げないでよ、アル！」

そんな捨て台詞を言い残して鈴は自分の教室に戻って行った。

第09話 転校生（中国）（後書き）

今回はアルじゃなく一夏と鈴が喧嘩します。

まあ、理由はまだ考えついてないんですけどね。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第10話 口喧嘩（前書き）

まさか！今回も箒が（ちょびつとだが）出るとは！
書いててなんでだかさりげなく箒が入ってきましたW（え

ということでも今回もちょっとだけ箒が出ます。

それと、紅椿が出るまでは基本空気になることが決定しました。
箒ファンの皆さんすいません。

第10話 口喧嘩

「待ってたわよ、アル！」

食堂につき、ドーンと待ち構えていたのは噂の転校生の鈴。

小さいころから突き通しているツインテール（正しくはサイドアツプテール）をなびかせ、手にはトレイを持っている。

ちなみに鎮座するは醤油ラーメン。

「とりあえず、どいてもらえると嬉しいな。後、そこにいると通行の邪魔になるんじゃ・・・」

「わ、わかってるわよ！」

「それと、のびるよ」

「それもわかってるわよ！大体、あんたを待ってたんでしょうが！なんでもっと早く来ないのよ！」

「それなら先に席取って待ってればいいのに。とりえず、席取っておいて。僕も貰ったらすぐ行くから」

「・・・早くしなさいよ」

軽い会話が終了。

諦めた鈴は空いているテーブルを探しに行く。

それを確認したアルは最速で特盛りラーメンを注文。
一夏は少しくすくす笑っていた。丸1年会ってなく、久しぶりなの

で楽しそうだ。

その後ろで箒は誰？みたいな顔をしないで、さらにその後ろでセシリアが焦り気味な、というかバリッバリ焦った顔をしていた。
新キヤラ登場で焦るのはやはりサブキヤラの運命なのか。

少ししてから注文した料理が出された。

特盛りの器がアルの顔より大きいのは気のせいじゃない。

きよろきよろしてから鈴がいるテーブルを見つけ、トレイを持った一夏と一緒に座ることに。

「鈴ちゃん、いつ日本に帰ってきたの？おばさん元気？いつ候補生になったの？」

「ちょ、一夏、質問多いってば・・・て言うか、何1人で黙々と食ってんのよ！」

「ごくごくっ）ん？」

すでに汁を飲み終えようとしているアル。

この早食いはみているだけでおなかいっぱいになりそうだ。

こんな小柄なのにこんな大食いなのはやはり驚く。

大食い大会に出れば大きな巨漢の男でも簡単に撃破できるだろう。

それと、大量に食べたものがどこに行くかわからないというのもまた不思議。ついでに言うならアルはどれだけ食べても太らない。

多めに食べる方の女子も、アルをみて羨ましそうだ。

「ふう・・・で？」

「『で?』じゃないわよ、『で?』じゃ!」

「ならどう返せばいいの・・・」

「2人とも知り合いだったんだね。私、ビックリしちゃったよ。いつ知り合ったの?というかどうかという関係?まさか付き合ってるのか?」

何気に質問の多い一夏。

本当に久しぶりでいろいろ話したいのだろう。

「なっ、一夏、何言って!」

「まさか、それはないよ」

「・・・」

「えっ、なに?」

「なんでもないわよ!」

いきなり睨まれてから怒られる。

アルは、何かしたかなあ、と疑問。

まあ、何かしたから怒っているわけだが。

「あ、そうだ、紹介するね。箒ちゃんが引越した後、転校してきた凰鈴音ちゃん。略して鈴ちゃん。箒ちゃんがファースト幼馴染なら、鈴ちゃんはセカンド幼馴染ってかんじ」

「ああ、どうりで仲がいいのか。私は篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

「あゝ、よろしく」

握手を交わして挨拶終了。

先ほどからセシリアが空気状態だ。

どうにかして喋りだそうとするが中々タイミングが見当たらない。
もはや今回は見せ場なしだろう。

そして気がつければアルは特盛りラーメン5杯目に突入していた。

今までの少しの時間でどれだけ食べるつもりだろうか。

というかどれだけ入るかが気になる。

「今日の夜はあんかけ焼きそばが食べたいなあ」

『もう夜ごはんのこと考えてる！？』

「あ、今食べればいいのか。すいませーん、あんかけ焼きそばくださいー。特盛りでー」

『まだ入るの！？』

「余裕のよっちゃんってやつだよ」

『ギャグが古い！』

「ええっ」

食堂にいた生徒全員に突っ込みをいれられた。

side out

「という訳で、部屋代わって？」

時間は過ぎて夜8時を回ったところ。

夕食は宣言通りあんかけ焼きそばの特盛り。

ついでにチンジャオロースと中華オンリー。

アルは好物がたくさんで、食事中は常に笑顔と白米のおかわりが絶えなかった。

そして先ほど鈴が来てこの状態。

ポストンバック一つだけを持ってきた。

「いやいや、何がという訳なの!？」

「いくら年下といってもアルは男。男が同室じゃ、一夏もイヤでしょ？ 私は平気だから代わってあげようかなって」

「いや、別にイヤでは・・・」

「別にいいじゃない。ね？」

「ね？ じゃなーい! というか、鈴ちゃん急すぎ!」

入口で絶賛口論中の2人。

正直言って迷惑なので他でやってほしいが、アルにそんなことを言える勇気などないので、しぶしぶヘッドフォンをしてバイザー型のIS調整機などを使って一角を調整している。

ビームマグナムが1丁にEパックの予備とすでに装填されているので合計15発。ハイパーバズーカが2つに種類別の弾が数種。

ビームがトリングガンが合計で4挺にシールド2枚。

ビームサーベルが両腕に2基、バックパックに2基でオールOKだ。

「ああ！もういいわよ！一夏なんて大っきらい！」

「私だってそういう鈴ちゃん嫌いだよ！」

気がつけば2人は口論から口喧嘩に早変わり。

お互いがお互いを「嫌い」といって絵に描いたようだ。

ヘッドフォンをしていたのでアルの耳には入っていない。

バイザーで目を覆っているのどんな状況かもわからない。

はつきり言って無関係だが、アルは何が起きているか少し気になっていた。

「一夏？」

「先に寝るから。寝るとき電気消して」

「え？でも、まだ8時だよ？」

「いいから私は寝るの！お休み！」

鈴がドアをこれでもかといわんばかりに閉める音でようやく気がつく。

一夏の名を呼び、どういう状況下聞こうと思ったが、返事は斜め上。すぐさま寝間着に着換えた一夏は自分のベッドに入り、うつ伏せに

なつて布団をかぶるようにして寝てしまった。

それを見てアルは何があつたかわからないでいる。

突然大きな音がしたかと思えば一夏は怒り気味。

さっきまで鈴姉がいた十大きな音がしてから鈴姉がいない十一夏が物凄く不機嫌Ⅱ・・・まさか喧嘩？

ちよつとおかしいが状況推測。

一人納得したアルは、シャワーを浴びてから眠ることにした。

第10話 口喧嘩（後書き）

一夏と鈴の喧嘩でした。

理由としては、部屋を代わってほしい↓性格の問題↓お互い頑固↓融通が聞かないから嫌いみたいな感じですかね（笑）

次回はたぶんクラス対抗戦だと思います。

アルが2人を仲直りさせようとしてちょっとだけ奮闘する（かも？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第11話 クラス対抗戦（前書き）

今回はいつもより長め。

何というか引きずり過ぎたからですかね。

そして終盤はゴーレムが乱入してきますがもう一機・・・？

第11話 クラス対抗戦

翌日。

一夏はやはり不機嫌だった。

そして1組にやってこない鈴を見つけたが、やっぱり不機嫌。

一夏は鈴ほどではないが、鈴は全体的に『怒ってますオーラ』を出していた。廊下で一夏と会ったときはスルー、目があってもすぐにそらす。

食堂で会えば露骨にふんつと鼻を鳴らしながら背中を向けるなど、喧嘩したということが丸わかりだ。

「あ、対戦表。今日発表だったんだ」

放課後、一夏と廊下を歩いていると、ふと目に入ったもの。

アルはクラス代表なので、対抗戦に出る。

対戦相手は——

一回戦

1年1組 アルフォンス・ラプラス

VS

1年2組 凰 鈴音

と、少し狙ったような組み合わせ。

これを見たアルは考え出した。

（一夏と鈴姉は喧嘩してるんだよね？ 実際本人喧嘩してるって言うてたし。これって、仲直りのチャンスじゃ？）

気になった結果、本人に直接聞いた。

一夏はちよつと言いにくそうに、喧嘩した、と言った。

鈴の場合少し怒りながら言い、また不機嫌になってすぐにどこかに行ってしまった。

「一夏、鈴姉と仲直りしたくない？」

「・・・し、したいよ？でも、喧嘩した翌日だし、私からは言いにくいし、その・・・」

「じゃあ、僕に任せて！クラス対抗戦まで引き延ばしになるけど、絶対に仲直りできるようにするから！」

「え？あゝ、えっと、いいの？というかどうかやって？」

「うん。えっとね——」

side out

そんなこんなでまた翌日。

一夏はアルの提案（仲直り計画）を快くOKしてくれた。

まあ、基本動くのはアルになってしまふのだが。

現在の時刻は昼。

アルは2組手前にいる。

「あ、来た。鈴姉」

「なによ」

「お昼食べに行こ」

「なんであんたと昼食べなきゃなんないのよ」

「え、だって僕まだ食べてないし。鈴姉も今から食べるんでしょ？だから一緒に食べようかなって」

とりあえず、仲直りさせるためには接触あるのみ。

こう言うときのアルはいつもの引き気味でおろおろしたりした弱いアルとは一味違い、積極的かつやる気がすごい。だが不機嫌の鈴の壁は少しばかり分厚かった。

「なら一夏と食べればいいじゃない。いつも一緒なんだから」

「それがね、一夏、先に他の人と食べちゃったんだって。1人で食べるのさびしいから、ダメ？」

「う・・・はあ、しょうがないわね。今回だけよ」

「やった！」

半分嘘で半分本当。

一夏が先に食べたのは本当だ。だがアルは1人で食べるのがさびしいなんてちよつとも思ったことがない。

少しあれかもしれないが、束と会うまでは基本1人だ。

両親は夜遅くまで仕事、兄はISの技術者、そして姉はIS操縦者。

当然帰りが遅い、もしくは帰ってこない。」

まあ、そんな話は置いておいて。

了承してくれた鈴とともに食堂へ向かう。

今日も中華を頼むアル。

それに続いて鈴も中華を頼んだ。

「鈴姉って、一夏と仲直りしたいとか思ってたの？」

「な！？そんなこと思ってるわけ・・・あると言えばあるわね・・・」

「（ビンゴ！）なら、仲直りすれば？」

「そんなの言いにくいじゃない。あたしから言いだしたのに、あたしから謝るの、すっごく気まずいと思うし」

鈴も一夏同様に仲直りしたい気分。

でもやはり言いにくそうだ。しかも先に言いだしたのが自分なだけあって物凄く気まずい。小学校のころに喧嘩したことがあったがどう仲直りしたかとも思い出せなさそうだ。

「そういえば、クラス対抗戦の一回戦って鈴姉が相手だよね？」

「いきなり話題変えないでくれる！？——って、あ」

「あ、気付いた？クラス対抗戦で、僕が勝ったら鈴姉から謝る。鈴姉が勝ったら一夏から謝る。その代わり、勝った方には僕がなんでも言うこと聞いてあげるよ。一つだけだけどね」

「・・・何、あたしに勝つ気でいるのよ」

「うん。だって普通は言いだしっぺが謝るものでしょ？だから僕が勝たないといけないし」

一夏はクラス代表ではないので対抗戦には出れない。
変更しようにも、すでに組み合わせは決まっている。
なのでアルが戦うしかない。

そこで考えたのがこの案。

一夏が戦えないから代わりにアルが戦い、負けた方から謝る。
そしてそれだけだと乗ってくれないのでアルの条件。

勝てば一夏、負ければ鈴の言うことを聞く。

アル本人としては、あまり無茶な事は言わないだろうと考えての条件だ。

「いいわよ、やってやろうじゃない。その代わり、あたしが勝つんだから覚悟しなさいよね」

「じゃ、決まりね」

ウィンクをしながら鈴を軽く指さすアル。

これ以後はクラス対抗戦を待つだけとなった。

それまでに2人が仲直りしてしまったらという考えがあったが、気にしたら絶対に負けだ。

side out

2週間後でようやく5月。

試合当日となり、第2アリーナ第一試合が始まろうとしていた。

2人とも噂の新生、しかも片方は男ということもあってアリーナは全席満員。さらには通路も立って観戦する生徒で埋めるつくされている。

会場入りできない人はリアルタイムモニターで観戦らしい。

（落ちつけ・・・落ちつくんだ。ああ、でもこんなに人いると緊張するなあ・・・）

目の前には鈴と赤み掛った黒色のIS『甲龍』

セシリアのブルー・ティアーズとは違い、近距離格闘型。

背中には主力武器の『双天月牙』

アルは前と変わらず純白のIS『一角』

左手にはシールド、右手には何も持っていなかったが、先ほどビームガトリングガンで1挺だけコールし手で持っている。

正体不明だった変身した姿は、リミッターが解除された一角の本当の姿で『デストロイモード』と呼ばれるものが判明した。

束から受け取った設計図を見て、ほとんど自分で作ったはずのISなのにこんな機能があったとは知らなかったと激しく後悔。

おかげで調整に時間を割きすぎてしまい、訓練時間が短くなったほどだ。

『それでは両者、既定の位置まで移動してください』

アナウンスが流れ、移動する2人。

ビームガトリングガンのエネルギーはまだまだたまっていない。

背中に手を回し、双天月牙を構える鈴。

アルはその場で目をつぶって落ち着きを取り戻そうとしていたが、それを見た鈴は一瞬いらっときて、いたぶることを決める。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーツと、ブザーが鳴ると同時に鈴は斬りかかる。

ガキインッ！！

鈴の攻撃を間一髪のところまで防ぐアル。

遠距離武器は近距離では使えない。使ったら自分まで被害を食らう。

「初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど——」

振り払い、いったん距離をとる。

チラッとガトリングガンのエネルギーをみる。

——現在エネルギー充填率は70%——

まだ撃てそうにない。

マグナムよりも使い勝手がいいと言えはいいのだが、この充填時間が難点といったところか。

撃ってこないアルに対し、どんどん攻撃的になる鈴。

離れ続けて距離を取ろうとしてもすぐに詰められる。

正直言って、消耗戦は体力が少ない方のアルは苦手だ。

「——甘いわよ！」

「っ!？」

突然両肩の非固定浮遊部位が開いた。

そして中心の球体が光って、アルの偶然構えていたシールドに当り、アルはその衝撃で”殴り”飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

にやりと笑う鈴。

牽制の後は絶対に本命が来るものだ。

この状況だと、さつきよりも数が多く来る。

ガガガガガッツ!!!!

構えたシールドに大量の何か——『衝撃砲』が当たる。

先ほどから防戦一方のアルはもう一度エネルギーを確認した。

——98, 99, 100%充填完了——

それを見たアルは不敵に笑みを浮かべる。

最初の防戦から、今度はこちらの番だ。

ガトリングガンを構え、そしてトリガーを引く。

キュウウ・・・ガガガガガッツ!!!!

まず4つの砲身が回転を始め、緑色のビームが大量に撃ちだされる。

突然のことに驚く鈴だが、さすがは候補生。

すぐさま遠距離武器を使わせまいと、回避し接近して来た。

だがアルもずっと接近されて終わりではない。
左手のビームサーベルを外し、空中でキャッチして展開する。
そしてそのまま鈴の双天月牙を受け止めた。

「いきなりやる気出したわね」

「僕、負けるのイヤだから。姉譲りでね！」

バシィッ！

アルが振り払い、距離をとる。

お互いがにらみ合い、周りの歓声が盛り上がる。

白熱した試合はどちらが勝つかわからない。

今度は2人が同時に動いた時だ。

ズドオオオオンッッ！！！！

「「!？」」

突然大きな衝撃がアリーナを襲う。

アリーナ中央からは大きな煙が上がり、上を向くとアリーナの遮断
シールドを突破してきたのがわかる。

やがて、煙から出てきたのは黒いIS。

全身装甲。アルの一角と同タイプで両腕のビーム砲が特徴的だ。

——襲ってくる！

そう思い、構えた時だ。

再びアリーナに衝撃が走る。

壊された遮断シールドのむこう側から、緑色のビームが入ってきた。そしてそのビームを撃った張本人がアリーナに侵入してくる。

「ま、また、全身装甲・・・」

それはまたIS。

全身装甲で緑色。4枚の羽のようなバインダーが特徴的で、通常のISと比べたら一回りか二回りほど大きく、巨大だ。

そしてそのISはアルと鈴を無視し、黒いISに突っ込む。

近づかせまいと必死に振り払おうとする動きや、正確無比のスラスタ―操作。さらには待機中に襲ってこないところを見ると、黒いISは無人機を思わせる。

やがて、黒いISは緑のISに捕まった。

前側の羽に隠された隠し腕が両腕をつかみ、攻撃を許さない。

さらに両足も後ろの羽から出てきた隠し腕に掴まれ、完璧に身動きを封じられる。もはや逃げ場なしだ。

バチッ・・・

ドギユウウンッッ！！！！

何の躊躇もなしに、緑のISは解除された黒いISの操縦者を撃った。

そしてそれは爆破され、破壊される一瞬で見えた風穴から無人機だとわかる。

にやりと口元が笑うISの手にはISのコアが握られていた。

第11話 クラス対抗戦（後書き）

うーん、なんだか最後の方が無理やりすぎる？
ちなみに最後にやった行動はリムーバーです。

捕縛する↓リムーバー↓操縦者（機械）が残る↓撃って壊す↓コア
貫い

みたいな感じ？

そして緑のISはもちろんクシャトリヤです。はい。

次回は鈴&アルVSクシャトリヤ（操縦者不明）
リムーバーがあるから勝てるのか・・・？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第12話 叫び(前書き)

今回はアル君(一角) vs 4枚羽！
勝つのはどっちだ！？

そして総合pvが20000pvを突破しました！
これからもがんばっていききたいので応援よろしくです！！

第12話 叫び

『いいか、アル。ピンチの時は自分が大切にしているものの名前を叫べ。母さんや父さんでもいい。俺の名前でも、——の名前でもいい。ただし、神様なんて現実にはないものはやめろよ。空想なんて助けちゃいけないんだからよ』

ふと頭に浮かんだ兄の言葉。

家族が殺された時のショックから、一部の記憶は忘れた。だけど、覚えてることはたくさんある。

母や父とこと。

兄と一緒に風呂に入ったり遊んだこと。

姉に勉強を教えてもらったり、料理をしたこと。

他にもたくさん。

（なんで、今こんなことを思い出したんだ・・・？）

今は戦闘中。

目の前には右手にISコアを持った緑で全身装甲のIS（以降4枚羽）。

先ほどの黒い無人のISとは違い、バイザーをしているが口元が見える。

特徴的な4枚の羽、通常のISより大きなボディ。

モノアイのバイザーはこちらを見据えている。

（何だろう・・・どこかで見たことがあるような・・・いや、それはない。こんな全身装甲のISなんて、一角しか見たことない）

頭の中で自問自答を繰り返すアル。

記憶の中を探るが、目の前のISのことなんて知らない。
知らないのに、どこかで見た覚えがあった。

それに対し、4枚羽も動かない。

まるでこちらの出方をうかがっているかのようだ。

右手に持っていたISのコアは羽の中の1枚にしまっている。

どちらも動かず、それと同じで鈴も動けないでいた。

感覚でわかる。この手の相手はかなりの技量を持っている。

自分じゃ勝ち目がないことを思わせたいた。

（どうやってコアを取りだしたんだ？手に何か持ってるようには見えなかったけど・・・）

襲ってこない間、考え出しす。

コアを取り出す、というよりコアにするにはまず本体を解体してから初期化が必要だ。その工程を全くと言っていいほど無視したあのISは、現にコアを持っている。

そんなことを考え出したアルは、大がつくほどの馬鹿者だった。

「っ!？」

全員が静止する状況の中、4枚羽が突然動きだした。
しかも今度の目標はアルだ。

本体の両腕でアルの両腕を、前羽の隠し腕でアルの肩を捕まえる。
後ろの2枚のバインダー内のバーニアは一斉に点火。

そしてそのまま力押しで斜め下、地面に向けて加速を始めた。

「ぐっ……！うう……がはっ！！？」

アリーナの壁にたたきつけられ、痛みから力が抜ける。

そして脱力したアルを4枚羽は持ち上げ、そのまま腹を殴り気絶させた。ISは起動したままだが、先ほどの黒いISと同じようにコアを抜き取られる。

地面に倒れるアルは涙を浮かべていた。

それを見ている4枚羽の操縦者は少しの間動きを止める。

左手にある純白で菱形の形をした一角のコアを見つめ、また再びアルを見ていた。

「おねえ、ちゃん……」

「っ！———！？」

ガキンツッ！！！！

真後ろから双天月牙で斬りかかる鈴。

その攻撃は後ろの羽の隠し腕が持ったビームサーベル2基に防がれた。

「あんた！何やってんのよ！」

「……中国の『甲龍』か。良いだろう、相手になってやる」

4枚羽が喋りだしたことに驚く鈴。

もし勝てないとしても、あの手の中にあるコアだけは奪い返す。

相手は異形のIS。確実に鈴やセシリアの専用機と同じかそれ以上の性能だろう。それでも、鈴は引き下がりがりたくなかった。

目の前で何もできないまま崩れ去ったアルを見て、自分だけ助かるなんてできない。それなら自分もやられた方がましだ。

「それ、返してもらわよ！」

距離を取られ、衝撃砲を乱射する。

その攻撃は、すべて前羽2枚がシールドとなって防ぐ。

2本の双天月牙を連結させ、今度は接近戦に持ち込んだ。

だが所詮は代表候補生止まり。熟練したIS操縦者になかう訳がない。

右手に持ったビームサーベル一本ですべて受け止められる。

「この距離なら！」

「ほお・・・やるな。だが——」

両肩のアーマーが開き、衝撃砲を撃とうとする。

捨て身の攻撃に、4枚羽も少し驚いているようだ。

だが正直言って、驚いた程度だ。

「——候補生ごときがいきがるなよ」

「っ!？」

突然、衝撃砲が爆破する。

気がつけば、周りにいくつも小さなビツトの様なものが浮いている。それが衝撃砲を破壊したのだ。

「まあ、私にこれを使わせたことは褒めてやる。さあ、お前のISのコアも貰うでしょう」

side out

（一角が奪われた・・・僕が束姉とあの子と一緒にいる間、僕の全てをかけてあげた機体が・・・）

一角はアルが自分の全てをかけた機体。
完成までの年月は、約3年間。
寝る時間を惜しんでまで、料理をする時間を惜しんでまで、毎日調整を繰り返し、完成まで持つて行った。

途中、ドイツでの試験使用では全然わからなかったが、セシリアとの戦いで一角のことがたくさんわかってきた。
なのに一瞬で奪われた、なんて考えると嫌気がさす。

『大切なものの名を叫べ』

頭の中に浮かんだ兄の言葉。

ピンチの時は神様に願え、なんてよく言うが、神様なんていない。

だから誰かに、何かに願えと言っていた。
だから今がその時なのかもしれない。

「うう・・・」

「あっけないな。もう少し粘ると思ったのだが」

朦朧とする意識の中、ゆがむ視線の先では鈴がいた。

ISは解除され、4枚羽の足元で倒れている。

そして右腕には甲龍のコアが握られていた。

「・・・ニコーン・・・」

「っ?」

「ハア、ハア・・・ユニコーン!!!!!!」

よろよろと立ちあがり、叫んだ。

その名は一角ではない。なのに、一角は反応した。

左手にあったコアは光だし、アルのもとへ飛ぶ。

遠距離からのコールに反応した一角を確認したアルは再びISを装着する。

装甲には赤いライン。

そして次の瞬間、すべてが開いた。

——リミッター解除——

——デストロイモードへ移行——

右手をゆっくり背中へまわし、サーベルを勢いよく抜いた。

その瞳は冷たく、右手にある甲龍のコアだけを見つめている。

「っ・・・!ファンネル!!」

何かを感じ取った4枚羽はビット——ファンネルを展開させる。
驚異的な加速を見せながら、アルは突っ込んできた。

そしてサーベルを一振り。ファンネルをいとも簡単に破壊する。

無数のビームの雨。

軌道に軌跡。それらを完璧に読みながら破壊して近づく。

一気に間合いを詰め、振り抜き。

4枚羽の羽の内、左前羽のほとんどを切り落とした。

「返せ・・・」

4枚羽はコアでふさがった右手を守るように、左手でサーベルを構え、アルの攻撃を受け止める。

小さくつぶやいたその言葉は届いていないだろう。

だがそんなの関係ない。

返してほしい、じゃない。奪い返す、なのだから。

バチィッ!!

振り払われ、もう一度切りかかる。

そこから無理やりずらし、左手首ごと切り落とす。

逃げようとするところへ、がらあきの左手を伸ばし、ビームトンフ

アーを”90°”展開させ、腕をひねった。

そこにあったのは甲龍のコアを持った右手。

切り落とした手首は重力に従い、落ちようとするがアルはしっかりとキャッチした。

「くっ・・・!」

追い打ちとわんばかりに右手のサーベルで再び斬りかかる。

だがそれは間一髪のところでは上空に避けられた。

そして4枚羽はそのまま胸に装備されたメガ粒子砲を拡散で撃つ。

「なに!？」

かわした。

何もせず少しだけ動き、かわす。

要らない動きは何一つない。

「ちっ！」

このままいけばやられる。

それを確信した4枚羽は撤退した。

アルは何かを諦めたか、深追いはしなかった。

ただ、空中でデストロイモードが解け、アルはそのまま地面に落ちて行った。

第12話 叫び（後書き）

次回は事後の話。

アル君が一夏と鈴の仲直りを見届けます。

そしてもう一方でも少し動きが・・・・・・？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第13話 仲直り

「ん・・・んん・・・？」

4枚羽と黒いISの急襲から夕方。

全身に痛みを覚えながら、アルは目を覚ました。

痛みは主に腹から。たぶん4枚羽に殴られたのが効いたのだろう。

腕や足が痛いのは、エネルギーが限りなく0に近い状況で、頭からアリーナへ落ちたからだ。絶対防御も無敵じゃないからしょうがないと言えましょうがない。

それにしても、4枚羽に殴られて鈴が倒れているのを見てからの記憶が思い出せない。というよりも、覚えてないと言った方が正しいか。

どちらにせよ何があったかまったくもってわからなかった。

「隠れてないで出てきたら」

「・・・起きてたの？」

「今さっき」

カーテンの向こうに隠れていたのは鈴。

いつもの勝気そうな感じはなく、心配した様子だ。

鈴を見て、アルは少し思い出す。

（確か、甲龍のコアもとられたっけ？取り返したのかな・・・）

「その、ありがとう」

「ん？」

「甲龍のコア、取り返してくれて」

「・・・え？ 僕が取り返したの？」

「はあ？」

いきなりお礼を言われたと思いきや、疑問。

取り返したのがアル自身、ということに疑問が晴れない。

もしかしたら思い出せない部分で何かやったのだろうか。

というか、何かやったに違いない。

それ以外に思い当たらないのだから。

「まあ、いいわ。それと、あのISの操縦者知ってるの？」

「え？ いや、知らないけど・・・なんで？」

「だってあんた、気絶させられた後に『お姉ちゃん』って呟いてたじゃない。もしかして、知ってるのかなーって」

「いやだなあ、お姉ちゃんははずないじゃん。だって――――」

いつ呟いたかもわからないが、呟いていたらしい。

それを聞きとっていた鈴は、4枚羽の操縦者がアルの姉なんじゃないかと推測していたが、アルの返事でそれはなくなった。
なぜなら・・・

「お姉ちゃんは5年前に僕以外の家族みんなと一緒に殺されてるんだから」

「え・・・」

聞いてはならないことを聞いてしまった。

鈴がアルと出会ったのは去年。

その時アルはもう完璧に吹っ切れている状態だった。
なのでそう言うことが分からなかったのだ。

アルの発言で一氣に暗くなる保健室。

やってしまったと言わんばかりにアルはおろおろし始めた。

「あ、そういえば一夏と仲直りできた？」

「うつ・・・ま、まだ・・・」

「じゃあ、仲直りしなきゃね。試合無効だと思うし、二人同時に謝ること。ね、一夏」

「え、ええ！？き、気付いてたの！？」

「バレバレだよ。さ、2人とも仲直り仲直り。見られたくないなら僕はまた寝るから」

こう言うときのアルは本当に押しが強い。

いつもの弱弱しく、引き気味で消極的なアルとは思えない。

結局、一夏と鈴はアルが見守る中、仲直りをすることに。

「え、えつと・・・」

「そ、その・・・」

「「う、ごめん」」

side out

「いっただっきまーす!!」

同日夜の夕食。

目の前には大量の料理。

しかもまた中華オンリー。

酢豚にチャーハン。

やっぱりチンジャオロースがあって、ついでに餃子他。

今日のアルはいつもより一味違い、なんだかこっちが素なんじゃないかと思えるぐらい元気で、子供らしかった。

食べる量を除いては。

「んー、おいしっ♪」

物凄い笑顔。

それはもう本当に幸せそうで、邪魔なんてできない。

というか、邪魔したらISを展開されて蜂の巣だろう。

食べ物の恨みは怖い、と言うのはやはり当然なのだ。

「中華はおいしいなあ。また中国行って本場の中華を食べたよ。」

特にフカヒレとかアワビとか!」

「本当に中華大好きなんだね・・・」

「うん!」

「ん? アワビは中華なのか?」

「あれ・・・? ち、違うの・・・?」

箸のちよつとした疑問。

突然箸が止まったアルだが、気にせずまた食べ始めた。
今までのスピードが嘘のように。

「ちよつと調べよつと」

どこからともなく取り出したノートパソコンで調べ始めたアルだった。

side out

とある某国、の某所。
基地の地下にて。

「ふっ、”ユニコーン”のコアを奪ったところで引けばよかったのに、遠距離からのコールで奪い返された揚句に機体を中破されて帰ってくるとは」

茶髪の女性とはある人物――4枚羽の操縦者にダメ出しをしている。それを聞いている本人は窓際で肩肘について反応なしだ。

「無人機のコア一個が今回の収穫。やはりお前に行かせたのは失敗か」

「いや、失敗ではないよ」

奥から今度は違う女性が現れる。

赤い服を着た金髪の女性は、先ほどの女性の肩にポンツと手を置く。

「ちゃんとコアにあのシステムを組み込んでくれた。」クシャトリヤ”の中破は許そうじゃないか」

「何の話ですか？私は聞いていませんよ」

「リムーバーを使い、ユニコーンのコアを取り出す。そしてそのコアにあるシステムを組み込むんだ。そうすると一定の条件下で私たちにあって、いや世界中にとって一番ほしい情報が少しずつだが手に入る」

金髪の女性が軽く説明する。

世界中にとって一番ほしい情報とは何か。

それは彼女たちの会話の中で明らかにされた。

「世界にとって？まさかコアの・・・？」

「その通り。ユニコーンがデストロイモードを使えば使うほど、私たちには情報が来る。言ってみれば、コアという名の箱の鍵ということかな」

2人の話はまるで耳に入っていない。

端からそれに興味がないように4枚羽——クシャトリヤの操縦者は窓の外を見つめ続けている。首から下げた待機状態のクシャトリヤ（ネックレス）に目をやり、また窓の外を見る。

「アル・・・」

そしてただ一言、その名を呟いた。

第13話 仲直り（後書き）

最後のは袖付きの話ですね。

ユニコーン要素を入れようとしたら、こうなりました。

ユニコーンは箱の鍵。

クシャの操縦者が持っている間にプログラムを組みこんで、デストロイモードになる（リミッターが外れる）度にコアのデータを送るようなシステム設定です。

ブラックボックスを明らかにするためにはリミッターは邪魔ですからね。

解除された状態はチャンス、ということです。

さて、なんやかんやで1巻の内容が終わりました。

アニメで言うとなんて第04話かな？

次回はついに前作ヒロインのブロンドジェントルが！

部屋はしょうがないので一夏には退散してもらえないかな。

そして朝から感動？の再開が待っている（かも）

誤字脱字、感想あればお願いします。

第14話 転校生（フランス）

『絶対にアルを1人にしないよ』

いつ言われたか定かじやないが、姉に言われた一言。いつも優しく、たまに厳しく。それでもやっぱり優しく。

母も父も兄も、自分を1人にしないと云ったが嘘だった。

いつも仕事仕事で時間を作ってくれない。

姉だけが時間を作って一緒にいてくれた。

それでも時間はあるときは遊んだりしてくれる。

（みんな嘘吐きだ）

それなのに、家族は自分を置いて逝った。

まだ8歳の小さな少年を1人残して、殺された。

それを見たアルは相当なショックを受け、一度心が粉々に壊れた。涙を流し、血だらけな家族を見続けて、一部の記憶をなくした。

あれはお父さん？

これはお母さん？

それは兄ちゃん？

これがお姉ちゃん？

顔なんてわからない。

見れなくて、見たくなかった。

涙と血が混ざって、目がかすむ。

怖くて怖くてたまらない。

1人という不安に包まれた。

そしてただ一つだけ疑問があった。
それは本当に単純で、誰もが思う。

なんでお兄ちゃんの部屋”だけ”あらされていたの？

side out

(なんであんな夢を・・・なんで・・・)

いやな夢を見た。

怖くて、不安で、寒い。

赤く、血の匂いが漂う家。

自分だけ取り残されたかなしさと寂しさ。

あらされていた兄の部屋にはたくさん紙が散らばっていた。

(・・・忘れよう。あんなの、もう思い出したくもない)

あの記憶は、心の奥底に。

気を取り直して、今日も一日を乗り切ろうと意気込む。

「今日は何と、転校生を紹介します」

現在朝のHR。

山田先生が話を切り出す。

このタイミングでまた転校生。

今度は3組かと思いきや戻って1組。

クラス全体がそわそわし始め、その転校生が入ってきた。

「あ・・・」

入ってきた生徒は男子の制服を着ている。

美少年ともいえる顔つきに金髪でまさしく『貴公子』
そしてアルのよく知っている顔だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさん、よろしく願います」

（あれ？名前・・・というか、なんで男装・・・？）

目の前の男子——シャルルは挨拶をする。

アルの知っているのは、もともと女。

しかも名前が『シャルル』ではなく『シャルロット』だ。

だがこの状況でそんなことは口走れない。

なぜなら、今のアルはいつもの弱気なアルだからだ。

「お、男・・・？」

「はい。こちらに、僕と同じ境遇の——」

シャルルの言葉は最後まで続かない。

そう、なぜなら女子の声にかき消されたからだ。

「きゃあああ——っっ！——！！！」

「男子！2人目の男子！今度は同い年の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美系！アル君みたいに守ってあげたくなる系の！」

「貴公子キャラ最高！」

感想が飛び交いまくり。

ビックリするシャルルだが、アルもアルで耳をふさいでいる。
他のクラスから生徒が来たらもっとうるさくなるだろう。

教職員のみなさんお仕事大変そうですが頑張ってください、とアルは心の中で一礼。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに鎮める千冬。

本当に面倒くさそうで、それでいいのか教職員。
また面倒そうに続ける。本当に面倒なんだろう。

「今日は2組と合同でIS実習を行う。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。それからアルフォンス」

「わかってます」

「話が速くて助かる。では、解散！」

すぐさま教室から出ていく千冬。

今日はなんだか機嫌が悪そうだ。

その後を山田先生がおろおろしながら追いかけている。

でもって、シャルルの面倒をアルが見ることに。

まあ、当然と言えば当然だ。

これはすぐに推測がついたからさっきのようにアルは返したのだから。

「ア、アル、久しぶり——」

「今はいいから移動が先」

そう言いながら何の躊躇もなくシャルルの手をとる。

ちなみにこの2人はフランスでの幼馴染。

一緒に遊ぶことは多々あり、引っ越しするまで1人のアルの面倒を見ていたらしい。

「男子は基本アリーナの更衣室で着替えるから、早く移動しなきゃいけないんだ。実習の度にこれだから早めに慣れて近道とか探してね」

「う、うん・・・」

小さいアルが自分より身長の高いシャルルを引っ張っている。

久しぶりのアルとの再開を喜びたいシャルルだったが、アルはそれを無視して急いでいた。今、速度を落とすと大変なことになる。

なぜなら——

「あ、転校生発見！」

「しかもラプラス君と一緒に！」

ナイスタイミングでHRを終えた他のクラスの生徒が道を阻むから

だ。

情報先取のために出てきた尖兵の波に捕まれば最後、質問攻めの揚句に運が悪ければ大幅に授業に遅刻。鬼教師の特別カリキュラムという地獄が待っている。

「むう・・・めんどいなあ」

「ど、どうするの？」

「こうするの。スウー・・・あーっ！」

『?』

「隙あり!!」

自分たちが向かう逆側の方向に指をさしながら大きな声を出す。
なんだなんだと振り向いた隙に2人は駆け出した。

全力疾走した2人は先生に見つからない事を祈りながら逃げ続けた。

side out

「ふう・・・振り切った」

約数分間の奮闘。

逃げ続けるの使った体力は朝ご飯全部を消費したかもしれない。

現在場所はアリーナ内の更衣室。

息を整え、時間を見ると授業まであと数分しかなかった。

「久しぶりだね。2人でこんなに走ったの」

「昔話してる暇ないよ。授業に遅れたら本気で怒られるから。千冬さんマジで怖いよ?」

「そ、そうなんだ」

「僕あっちで着替えるから、着替え終わったら呼んで」

何というか、先ほどからアルに避けられている気がする。

6年ぶりの再会をしたいのにスルーされるし、昔話をしようとしても話を続けようとしてくれない。

昔は着替えのときは気にもしていなかったのに、自分から離れていく。本当に避けられているとしか思えなかった。

(デュノア社社長も大きく出たなあ・・・まさかシャルを男装させてくるなんて)

アルは着替えながらちよつとした考え事。

シャルルは名字が『デュノア』

つまりはデュノア社の社長の娘だ。

現在デュノア社は第2世代量産のシェアが第3位。

だが所詮は第2世第。今、各国は第3世代の開発に着手している。デュノア社は第3世代の開発のための時間とデータがない。

そこでシャルルを男装させてアルに接触させに来た。

同じ特異点であれば、接触は簡単だ。

どうせアルの一角のデータを盗ってこいと言われてきたのだろ

う。

だが一つ誤算がある。

それは2人が幼馴染というところだ。

（そういえば、6年ぶりかあ。フランスに戻ったことあっても、会
いに行っていなかったからなあ。後でいろいろ話さなきゃ）

第14話 転校生（フランス）（後書き）

次回はアル君VS山田先生！？
セシリアと鈴は出番なしです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第15話 教員対生徒（前書き）

今回はアル君VS山田先生！！

果たして勝てるのか。

デストロイモードへのきっかけはつかめるのか。

第15話 教員対生徒

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はい!』

いつもの倍の人数で実習開始。

返事も妙に気合が入っており、すごいやる気を感じられた。

「今日は戦闘を実演して貰おう。凰!オルコット!」

早速呼ばれたのが専用機持ちで代表候補生の2人。

理由はもちろんすぐに始められるから、だそうだ。

それでもぐちぐち言いながら前に出てくる。

大方、逆らって出席簿アタックが来るのがいやなのだろう。

そんな2人に、千冬が小さい声で何かを告げた途端――――

「ここはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの
出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね!専用機持ちの!」

物凄いやる気になった。

予想するならアル関連だろう。

好意を持っている相手にいいところ見せたいのは男女共通だ。

そんなやる気を出してる2人を見る他生徒。

どう反応すればいいか困っている時だった。

「あの・・・織斑先生。僕もやっちゃダメですか？」

『!?!』

真ん中あたりで精いっぱい手を挙げて発言した人物は――アルだ。それに驚き、アルより前の生徒は全員振り返り、後ろにいた生徒も視線をアルに移した。

あの臆病で引き気味で消極的なアルが自分から手を挙げて発言した。しかも言った言葉が『自分もやりたい』と同じ意味。

同じクラスの全員は驚くのも無理がなく、千冬自身も驚いている。

「ダメなら別に良いですけど、出来るなら僕もやりたいです」

「お、おお、わ、わかった。では、お前が”山田先生”の相手をしてろ」

「「はい?」」

疑問に思ったのが鈴とセシリア。

まさか相手が山田先生とは思わなかったのだろう。

というかさつきから姿が見えないのだが、どこにいるのか。

そんなことを考えている時だった。

どこから、というか空から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「あああー!?!ど、どいてくださーいっ!?!」

「え?」

ドカーンッ！！！！

声を放ちながら落ちてきた誰かはアルのいた場所に墜落。すぐさま一角を展開したアルは器用な動きをとって綺麗に回避した。

「あっぶなっ！！？」

「アル、大丈夫？」

「あ、一夏。まあ、僕は大丈夫だけど・・・山田せんせーい、大丈夫ですかー？」

少しめり込んだ地面で倒れている落下物（山田先生）。

ISを展開していて怪我はしないのだが、一応心配をする。右手を差し出して、立つ手伝いをする。

今更だが、アルはISを展開している時だけみんなと同じ目線になれるのでちょっと嬉しいらしい。

落ち着きを取り戻したところで、アルが山田先生と戦うことに。

候補生の2人は退場、出番はなくなっちゃってしょんぼりしてる。

山田先生が元候補生ということに驚きながらもアルは装備を展開した。

また右手にガトリングガンと懲りないが、しょうがない。

主力武器がビームマグナム全15発にこれが4挺とハイパーバズーカ2つ。

バズーカじゃ勝てないのがわかっているので、ガトリングガンを持って、背中のバックパックにマグナムを待機させている。

『では、始め!』

「(本格的に一角に乗り始めてから、いろいろ思い出してきた。強い人と戦えれば、デストロイモードのこともわかるかもしれないし、何か思い出せるよね。それに、何か大切なこと忘れてる気がするから) スウ・・・行きます!」

今回はしっかりエネルギー充填済み。

少しばかり高いところまで行き、準備を整える。

千冬の合図がしてから少しの間だけ待ってくれた山田先生に感謝し、戦闘開始だ。

ガガガガガッツツツ!!!!

最初に仕掛けたのは珍しくアル。

ガトリングガンを惜しみなく乱射し、当然なくとも牽制になれば良しとする。

だが山田先生も元候補生で現教職員だ。

生徒に負けるわけにはいかず、アルの攻撃を軽々とかわしている。

しっかり防御もし、さすがは先生。

いつものおろおろした様子が嘘のようだ。

「片手でダメなら――――」

――ビームガトリングガン追加コール――

――エネルギーは充填済みです――

「――――両手でどうですか?」

弾幕がさらに激しくなる。

マシンガンの利点は休みなく撃てるところだ。
軽々とかわされ続けるのなら量を増やせばいい。

下手な鉄砲数撃ちや当たるとはこのことだ。

山田先生もこれにはたまらず防御の姿勢に入る。
だがこんなに短時間で撃ちまくれば当然――――

ガガガッッガッ・・・キュウウ・・・

――エネルギー――

――再充填を開始しますか？――

「・・・え、いや、やんなくていいから！」

「ちゃんと残りのエネルギーは確認しなきゃダメですよ？」

「え？あ、はい」

残りのエネルギーは300を切っている。

ガトリングガンも2挺も使ったせいで200も持っていかれた。

こんな会話は別にいいのだが、はつきり言ってやばい。

無理やりな攻めで無理やり作った優勢状態。

それが崩れれば再び立て直すのはもう無理だ。

「うおっ！つとと、危ない！！」

アサルトライフルの雨をギリギリでかわしてガードするアル。
残りエネルギーはぱっとみ240ほど。

このまま防戦一方のまま負けるのはさすがにイヤだ。
ガトリングガン2挺とも左手に連結させ、背中のマグナムに手を伸ばす。

（この状態からなら、連射して1発でも当れば・・・）

考えが浅はか。

マグナムを構えた途端に銃弾が手に当たってはじき落とされた。
これぞまさしく絶体絶命。

まあ、一度でも優位に立てたのだ。まだいい方だろう。

「（あ、グレネード・・・）じゃなくて！まだ諦めません！！」

迫りくるグレネードを回避して急降下。

地面に落ちたマグナムを拾いに隕石のように一直線で落ちる。

残りエネルギーが100を切っている状態で、アルはある行動を起こしてしまった。

イグニッション・ブースト
『瞬時加速』

それにより一角のエネルギーは2桁。

地面に当るか当たらないかのギリギリのところでマグナムを拾い上げてから、無理やり急上昇する。おかげで物凄く気持ちが悪い。

ドギユウウンッッ！！！！

5発×3。

左手にカートリッジを持った状態で待機させ、撃ち終わるごとにまたリロード。だが当るところかかすりもしない。

完璧に諦めたこの後、一瞬でグレネードを食らってアルの負けとな

った。

第15話 教員対生徒（後書き）

なんかかんやでアル君の初負け（本編内でドイツでラウラにボロ負けしたのは一応本編では書いてるだけなん
で、実質初負けなんですよね。

クラス代表決定戦ではデストロイで一角が戦って勝っちゃうし。
クラス対抗戦でもデストロイで一角がクシャを逆リンチしちゃうし。
アル君がデストロイモードを操作できるようになるのはいつになる
かなあ・・・。

次回はシャルとようやく再開を喜ぶ話。

デストロイモード登場はまだまだ先になりそうです。

予定としてはやっぱりタッグマッチトーナメント時かな。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第16話 ルームメイト（幼馴染）

「で？」

「え、いや、その・・・え？」

昼休みの食堂にて。

山田先生に惨敗だったアルはシャルルとともに昼食中だ。

今日のアルメニューは珍しく洋食。

ミートスパゲティと何とも普通だがやっぱり量だろう。

シャルルもその量には驚いていた。

幼少のころはそこまで食べる、という訳でもない。

まあ、それでもそこそこの量を食べていたのだが。

「なんで来たの？」

「なんでって、男でISを動かせるからに決まってるよ」

「ふうん」

シャルルは実は女。

幼馴染なので顔を忘れるはずがない。

まさかの弟？

双子がいたなんて聞いたことも見たこともない。

というか、弟ならアルのことを知らないだろう。

あくまでいたらの話だが。

「で、ふおこのさんふいんふあふあみ？」

「い、今何と？」

「『で、その3人は何？』だって」

「一夏、今のよくわかったわね。正直わかんなかったわ」

3人とは一夏、セシリア、鈴のことだ。

アルと妙に仲のいい美少年シャルルのことが気になるのだろう。

口の中にモノが入ってる状態で喋るのはさすがに行儀が悪いが、その前に意味不明な発言を理解できる一夏がすごい。

さすがはメインヒロイン。格が違う。

そして最近筈並みに空気になってきたセシリア。

それと先日一夏と仲直りしたばかりの鈴だ。

「何って、アルとシャルル、でいいのかな？」

「あ、うん。いいよ。えっと」

「あ、私、織斑一夏」

「それじゃ、僕も一夏って呼ぶね」

「オッケー。で、2人が妙に仲いいから気になっちゃって」

「さりげなく自己紹介を混ぜましたわね」

流れるような自己紹介からの質問。

セシリアの突っ込みも華麗にスルーしている。

すぐに口の中のものを飲み込むアル。

まあ、シャルルが女だということ以外は特に隠す必要もないので、正直に「幼馴染だよ」と答えた。

「あ、そうなんだ」

「確かに同じフランス出身ね」

「まさかフランスに何か秘密が・・・」

セシリアの発言は案の定スルー。

まあ、2人もフランスから男のIS操縦者が出てくればそう思うだろう。

シャルルが女ということを知っていればその誤解も解けるはずだ。

いつの間にか山盛りのスパゲティを食べ終えたアル。

周りには一夏や他の女子がいる。

はつきり言って、喋りずらい。

シャルルといろいろ話をしたいのだが、発言を間違えれば女だということがばれるだろう。そう考えると食堂では迂闊にしゃべれない。

（男子同士だからどうせ部屋は同じだろうなあ。一夏は昨日の夜に他の部屋に引っ越しちゃったし。まあ、夜に話せばいいか）

そんなことを考えつつも食べるのをやめないアルだった。

side out

「で？」

「うえ？ ああ、えっと、また？」

同日夜。

結局アルの予想は的中、シャルルと同室になった。

今は邪魔はない。

部屋の鍵はしっかりと閉めたので誰かにいきなり入ってこられることはないはずだ。まあ、どこかの生徒会長は問答無用でドアをぶった切るらしいが。

「そういえば、まだ再会の挨拶してなかったね。6年ぶりの再会」

「あ、うん。本当、久しぶりだね。おじさんやおばさん元気？ ライルさんと——「死んだよ」——え……」

シャルルの言葉が止まる。

昔お世話になった人たちの死。

驚き、言葉が止まるのも当然だ。

「し、死んだってどういうこと……？」

「そのまんま。引越して約1年で僕以外殺害。顔は誰かわからないように皮を引き剥がされ、心臓は銃弾で一発。全員リビングで

死体が見つかって、金目の物は盗まれておらず。なのにお兄ちゃんの部屋だけ荒らされてた」

「な、なんで・・・」

「知らない。たぶんI S関係だと思うよ。兄弟そろってI S関係者だからね」

シャルルの質問に淡々と答えていくアル。
もはや暗いムードが晴れなさそうだ。

だがそんな暗いムードのままでは困る。
アルとしてはいろいろ話したいから止まるのは面倒だ。
だから無理やり明るいムードを作ろうとする。

「ま、人間絶対死ぬから気にはしてないよ。ただみんな死ぬのが早かったっただけで」

「でも、アルは1人なんだよ？」

「そう？意外に1人じゃないよ？シャルがいたり一夏がいたりで、僕は1人じゃないと思うんだけどな」

「（す、すごいプラス思考・・・）そ、そっか」

無理やりな笑顔はシャルルの暗いムードを吹き飛ばす。
何というか、いつもとはどこか違う気がする。
そう思い、シャルルは小さいころを思い出してみた。

物凄く元気で活発。

運動が大好きで毎日外で走ってた。

お兄ちゃん子でお姉ちゃん子。

考え方とかが子供っぽい。というか子供。

他にも色々。

今の消極的な性格とはまるで真逆。

元気で素直で純粋で健気でいつも笑顔。

あの時のアルがどこかに行ってしまったようにも思えた。

「どうせ、デュノア社社長に言われてきたんでしょ。僕の一角のデータ目当てで」

「え？ ああ、うん」

「安心していいよ、一角のデータなんてあげる気ないから。むしろ奪おう押したらシャルでも容赦しないよ」

「だ、大丈夫！ 僕もアルからものをとったりなんてしないよ！」

「それと、僕はたぶんフランスには戻らないと思う」

「どうして？」

アルの母国はシャル同様にフランス。

通常、IS学園を卒業したら母国に帰るなり帰属してる組織や企業に戻るのだが、アルの場合、男なのでどうにも言えない状況。

ぶっちゃけてしまうと、どこにでも行けるが、一つしか選べない。

普通なら、母国のフランスに帰るだろう。

なぜかアルはフランスには帰らないと言った。

「僕はあの大天才、篠ノ之束の助手だからね。あの人のところに戻らなきゃいけないんだ。助手って結構大変なんだよ?」

「え・・・えええええつつ!!!!!!??———むぐう!」

「大声禁止ね」

「(コクコクツ)」

何たる爆弾発言。

大天才篠ノ之束には助手がいた。

しかもISが動かせる男のアルがそうだ。

誰でも驚くし、大きな声も出しくなる。

シャルルもまた同じで、大声を出してしまい、アルに口をふさがれた。

「僕にここで勝とうと思っちゃダメだよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら親指でおでこをとんとんとたたく。その顔は昔の元気なアルそのものに見えたシャルルだった。

第16話 ルームメイト（幼馴染）（後書き）

うーん、何か微妙な回だった気がする。

ちなみに途中で出てきた『ライル』という人物はアル君の兄に当ります。

ギリギリで姉の名前が出なかった。

まあ、そのうち出るんですけどまだですね。

というか名前がまだ決まっていって言うのが本当の理由なんですけど。

次回はしよっぱなからあのドイツ軍人が転校してくるぞー！！
そして一夏に喧嘩を吹っ掛け、アル君がちょっとキレる？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第17話 転校生（ドイツ）（前書き）

眼帯兔がくるぞー！！

ということで今回からラウラ登場！

久しぶりに一夏の出番『多』！

あのアル君がちよっぴりキレる？

第17話 転校生（ドイツ）

『負け犬』

これ以上にはないほど今のアルにふさわしいかもしれない。

かつて一角の試験運用と、ドイツの『レーゲンタイプ』のISの試験運用時の模擬戦で銀髪の少女に言われた言葉。

手に持つマグナムはたたき落とされ、ガトリングガンはプラズマ手刀で4挺全て真っ二つ。AICで動きを封じられ、ルールカノンで狙い撃ち。

完膚なきまでに痛めつけられ、敗北をたたきつけられた。

そんな、冷たい瞳を持つ眼帯を付けた彼女がやってきた。

「ラウラ・ボーヴィットヒだ」

2日間連続での転校生。

しかも同じクラスなんて何かがおかしい。

普通なら違うクラスのはずだ。

だが、そんなのはどうでもいい。

アルは目の前の眼帯を付けた銀髪の少女をみて、少しばかり昔のことを思い出していた。

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

物凄くいたたまれない空気の中、山田先生がラウラに聞く。

だが返ってきたのは無慈悲ともいえる即答。

泣きそうな顔をする山田先生を無視し、ラウラはつかつかと一夏のところまで歩いていき、驚くべき行動に出た。

「貴様が―――」

右手を挙げ、一夏の顔めがけて手の甲で叩こうとした。

『!?!?』

パシンッ

いきなりの行動で、動けずに驚いているクラス全体。

肌と肌が軽く触れ、叩かれる音がした。

だが、一夏には何の異変もない。

「出会いがしらにそれはないんじゃないの」

それは隣にいたアルがラウラの右手を掴んでいたからだ。

誰も動けなかった中、唯一動き、止める。

その眼はいつもの弱気な眼と違い、セシリアと戦った時のような眼だった。

「ふんっ、負け犬ごときが私の邪魔をするな」

「っ・・・僕のことは何と言ってもかまわないよ。でも、友達を傷つけたりバカにしたりするのは許さない」

「許さない？私に勝てない負け犬が、か？」

「そうだよ」

ぎろりとアルを睨む冷たい瞳。

それでもなを退かないアルを見て興冷めしたか、掴まれていた腕を振り払い、空いている席に座ると腕を組んで目を閉じ微動だにしないくなる。

「アルフォンス、お前も座れ」

「あ、はい」

千冬に言われ、すぐさま自分の席に戻る。

その日、アルはなんでだかあんまり口を聞いてはくれなかった。

side out

翌日。

今日は土曜日なので午前は理論学習、午後は基本的には自由時間だ。さらにはアリーナが全解放されているので、ほとんどの生徒がアリーナに来る。当然、一夏達も実習で来ていた。

ちなみにアルはいない。

ちよつとした用事と一角の調整があるらしい。

「はあ・・・あっけなく負けた・・・」

「あはは、しょうがないよ。近接と中距離じゃ有効距離が違いすぎ

るからね」

先ほどシャルルと対戦した一夏。

近接武器の『雪片式型』しかない一夏と、大量の重火器をインストールしてあるシャルルでは勝ち目がなかった。

セシリアのときのようによく行くかも、と思い諦めず立ち向かう一夏だったが、アサルトライフルやサブマシンガン他で蜂の巣。あっけなくエネルギーを0にされて負けた。

「瞬時加速も読まれちゃったし、間合いはうまく詰められないし、ダメだなあ、私」

「そんなことないよ。格闘オンリーでもちゃんと射撃武器の特性を把握して、瞬時加速と零落白夜の使いどころを間違わなければ勝てるって」

「条件多いよお・・・」

シャルルは先ほどから一夏に教えている。

鈴やセシリア、特に箒のアドバイスはあてにならず。

セシリアは正確すぎて無理がある。

鈴は感覚でやれと言うので、まあ、わからないでもないがアバウト。そして箒は・・・擬音が多くて鈴よりもアバウトすぎた。

シャルルは教えるのが得意か、とてもわかりやすい。

同じ候補生のセシリアや鈴とは大違いだ。

「じゃ、とりあえず射撃武器の練習してみようか」

「へ？ ああ、えっと、他の人の武器って使えないんじゃない？」

「普通はね。でも所有者がアンロックすれば、登録している人全員が使えるんだ。だから、はい」

「う、うん」

シャルルから手渡された銃はなんだか妙な重みを感じた。

実際、ISのエネルギーフィールドで重さは感じられないのだが、初体験とあって精神的にそう感じられたのだろう。

とりあえず一夏は見よう見まねで構えてみた。

えっと、脇をしめて。

後、ちゃんと狙いを定めてっと。

意外に様になっているその姿。

シャルルも初めて使うにしては形がきれいだと言っている。

白式には『センサー・リンク』と呼ばれる射撃戦に必要なものが見あたらないため、最初から目測でやるしかない。

しょうがないのでそのまま最初の一発を撃ってみた。

バンッ！

「うわっ！？」

炸裂音に驚く一夏。

自分で撃ってビックリしてしまうほど、自分がやるのと見るのでは違うと再認識する。

「どう？」

「なんていうか、『速い』って言う感じかな」

銃弾は速い、というのはわかっていた。

だが自分で撃ってみて、その速さはまた違ってくる。

さらには反動がISによって相殺されているからといっても、やはり刀とはまた違う速さと手ごたえ。

初めての武器で心臓がバクバクとなっている。

「一マガジン分、全部撃っちゃってもいいよ」

「あ、うん」

「それにしても一夏、初めて撃つとは思えないね」

「あはは。なんていうか、ゲームセンターでのシューティングゲームみたいな感覚で構えてやってるだけなんだ。まあ、所詮はゲームだけど」

「初めてでも十分凄いと思うよ。やり方は人それぞれだしね」

友達になってから仲良くなるのが早いこの2人。

意外に似た者同士なのかもしれない。類は友を呼ぶとはよく言ったものだ。

途中、シャルルが一夏の後ろに回って姿勢を直してみたりもする。だが形がいいので直すところはそこまで無いようだ。

「一夏、銃の使い方上手だね」

「アル！？いつの間に！？」

「今」

ガチャガチャと音を立てて2人の隣に来るアル。

いつの間に来て、ISを展開させていたかわからない。

右手にはやっぱりガトリングガン——がない。

珍しく手に何も持っていない、と思いきや両腕に2挺ずつガトリングガンを連結されて装備させていた。今から何をしでかす気なのだろうか。

しかも背中のバックパックにはマグナムが待機されている。

何というか、物騒としか言いようがない。

「ねえ、ちょっとアレ・・・」

「ウソッ、ドイツの第3世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

ざわざわとアリーナがざわつき始めた。

一夏の射撃練習を見ていた2人と一夏自身も、その注目の的に視線を移す。

そこにいたのは噂の転校生。

ドイツの代表候補生で、アルのことを『負け犬』と呼び、一夏の存在自体を嫌っている眼帯少女ラウラだった。

「おい」

「・・・なにかな」

ISのオープンチャネルで話しかけてくるラウラ。

初対面で平手打ちを喰らいかけた一夏は、気が進まなそうに返事をする。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がない」

「貴様にはなくとも私にはある」

「そう。だったら学年別トーナメントまで待てば。その時でいいでしょ」

いきなり戦いを申し込んできたラウラに対し一夏は拒否。

理由がないのにいきなりは戦わないし、あちらにあるといっても今のアリーナでは人が多すぎるからかえって危険だ。

むしろ、学年別トーナメントで決着をつけた方が早い。

「ふん。ならば――――戦わざるを得ないようにしたやる」

突然ラウラは左肩に装備された実弾砲を一夏へ向けて撃った。

「っ!?!」

ゴガギンッ!!

その射線上にアルが飛び込む。

左手にシールドを展開し、装備して実弾砲を弾く。

そして流れるように両腕を構え、何の躊躇もなく撃った。

ガガガガガガッツッツツツ！！！！！！！！！！

ビームガトリングガン4挺の一斉射撃。

4×4、合計16の砲身から大量のビームが放たれる。

「ふんっ！」

ラウラは右手をかざし、よけようもしない。

そして緑色の大量のビームはラウラに当る前に止まった。

「次はビームマグナムを当てて」

「無駄なことを。負け犬ごときが私に立ちあがるなど」

「僕は今怒ってるんだ。言ったよね？友達を傷つけたりバカにした
りするのは許さないって」

背中のビームマグナムを構えたアル。

その眼は本気で怒っている、強い眼。

負け犬、なんて言葉は絶対に似合わない。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけた担当の教師がスピーカーを持って叫んでいる。

2度も横やりを刺されたラウラは興が削がれ、あっさりと戦闘態勢を解除するラウラ。それを見たアルも同じように解除する。

「一夏、怪我とかない？」

「え？ ああ、うん。大丈夫だよ。アルが守ってくれたから」

振り返ったアルはいつもの優しい顔。

さっきまでの怒った眼差しはどこへ行ったのやら。

「あゝ、重かった。あれ、片腕でも十分重いんだよね」

「片腕・・・ってことはガトリングガン？」

「うん。1挺だけなら問題ないんだけどね。ていうか、ISを展開してて重いとか関係ないはずなのに、重さ感じちゃうんだ。どうしてだろ？ というかもう戻ろうよ。僕おなか減ってきた」

「あ、いつものアルだ」

「何か言った？」

「ううん、何にも」

第17話 転校生（ドイツ）（後書き）

なんか今回はアル君の出番が少なめでしたね。
まあ、こんな回もいいんじゃないかな。

次回はついにアル君がブチギレてデストロイー！！

操作は一角に持っていかれるが、怒りを拳に込めてラウラにぶちまける！！

殴る！蹴る！アッパー！たたき落とし！掴み！タックル！その他！
近距離格闘技が豊富です（笑）

誤字脱字、感想あればお願いします。

第18話 怒り（前書き）

前回のあとがきにデストロイが出ると書きましたが、ちょっと予定変更。

終盤には出るには出るんですが、バトルにはなりません。

第18話 怒り

「そ、それ、本当!？」

1週間の始まり月曜日の朝。
廊下まで大きな声を出していたのはおそらく一夏だろう。

「なんだろう?」

「さあ?」

隣にいるシャルルは疑問。

アルはどうせ自分には関係ないだろうとお手上げポーズ。
まあ、いつものことだ。

「イヤ、本当かどうかはわかんないんだけど、この噂、学園中で持ちきりなのよ? 月末の学年別トーナメントで優勝したらアル君と――」

「アルがどうかしたの?」

「「「きゃあああつ!!?」」」

シャルルが教室に入るなり聞いてみた。

すると女子の群れは何事かと声をあげながら散り散りになる。

突然のその行動にシャルルは「何かした・・・?」みたいな目でアルの方向に振り返った。アルはそれに対し苦笑いしかできない。
とりあえず自分の席に荷物を置く。

「で、何だったの？」

「え？ ああ、えっと、さあ？ 私、さっき来たばかりだし、アルと同じ辺りで区切られちゃったから」

「思いつきりおっきな声出してたのに？」

「・・・アル、いいこと教えてあげるよ。『口は災いのもと』っていうんだよ？」

「え？ ああ、うん。そうだね。で、どうして？」

一夏なりの優しい忠告を全く理解していないアル。

シャルルは、何か悟った様な顔をした。

さらに一夏は物凄く笑顔で、頭に血管マークが見える。

状況が全く読めないアルはとりあえず諦めた。

その諦めを確認し、一夏の頭の血管マークは消える。

「・・・(ちらっ)」

「・・・(ふるふる)」↑お手上げポーズ

side out

「「あ」」

そろって不抜けた声を出したのは鈴とセシリア。
代表候補生の2人だった。

場所は放課後の第3アリーナ。
目が合うや否や見えない火花を散らす。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

お互いの狙いは最高で優勝、最低でも優勝らしい。
目に見えない火花がさらに激しくバチバチと散らされている。

「ちょうどいい機会だし、この場でどっちが上かはっきりさせとくつてのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらがより強く優雅であるか、この場で決着を付けようではありませんか」

瞬時にISを展開する両名。

鈴は『甲龍』、セシリアは『ブルー・ティアーズ』だ。

そしてすぐさまメインウェポンをコールする。
対峙した2人が模擬戦を始めようとした時だ。

「「!？」」

いきなり違う方向から超音速の砲弾が飛来する。

緊急回避の後、2人はそろって砲弾が来た方向を睨む。

そこには漆黒のISと銀髪に眼帯。

機体名が『シュバルツェア・レーゲン』

操縦者は――――

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」

苦々しくその名を口にするセシリア。

鈴は親友一夏を殴ろうとしたやつ、で認識されている。

「・・・どういうつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

その手に握られる双天月牙を肩に乗せ、衝撃砲『龍砲』を準戦闘態勢へシフトさせる。セシリアも手に持つライフルを一層強く握りしめた。

「中国の『甲龍』に、イギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・データで見たときの方がまだ強そうではあったな」

牽制の砲撃から今度は口での挑発。

その言葉に2人は口元をひきつらせた。

「何？やるの？わざわざドイツくんだからやってきてボコられたい、なんて大したマゾっぷりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら、鈴さん。こちらの方はどうも共通言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？」

「貴様たちの様なものが、私と同じ第3世代の専用機持ちだとはな。数くらいが能のない国と、古いだけ取り柄の国はよほど人材不足と見える」

ぶちっ！

――最終安全装置解除――

2人の頭の中で何かが切れる音がした。
その証拠に武器の最終安全装置も解除いてある。

「この人、スクラップがお望みみたいよ!!」

「そのようですわね」

「ふっ、2人がかりで来たらどうだ？下らん負け犬を取り合うようなメスに、この私が負ける物か」

またもや挑発。

しかも今度は負け犬――つまりはラウラで言うアルの事を馬鹿にしてもいる。

この言葉に2人は堪忍袋の緒が切れた。

挑発なんてもはや関係ない。

「今何て言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたんだけど!?!」

「この場にはいない人間の侮辱まですとは、その軽口、二度とたたけぬようにして差し上げますわ!」

怒りをあらわにする鈴とセシリア。

ラウラは右手を自分に向けて振り、またもや挑発した。

「とつとと来い」

「「上等!!」」

side out

（なんであんな噂流れたんだろ・・・もしかして、アルに告白した子とかが？）

放課後、一夏はシャルルとアリーナに向かっていた。

またもやアルはいない。

先にアリーナ行って準備をしているそうだ。

会話がないので少し考えていた噂。

その内容とは『学年別トーナメントの優勝者はアルと付き合える』

どこからそんな噂が流れたのだろうか。

本人が聞いたら本気でイヤがりそうだ。

まあ、アル自身の耳には入ってないので何よりだろう。

「今日使えるのは確か第3アリーナだよね？」

「え？ ああ、うん。人が少ないらしいから、もしかしたら模擬戦と
かもできるって。トーナメントまで日がないから頑張んなきゃ」

結論から言うと、アルに拒否権はなしだろう。

だとすれば、優勝さえすればアルと付き合えるのだ。
年下好きで何が悪い。

恋愛に年齢なんて関係なのだ。

一夏は心で1人決意する。

何が何でも優勝して見せると。

そんなことを考えているアリーナに到着。

だが人が少ないという情報とは真逆で、人は結構いる。

「うわ、すごい人だからだね」

「模擬戦でもしてるのかな？」

ドゴオオンッ！！

突然の爆発に驚き、視線を移す。

煙を切り裂く様に現れた影は3つ。

赤、青、黒。

アリーナ内にいたのは鈴、セシリア、そしてラウラ。

状況から見ても、ラウラが1人の2対1。

だが優勢なのは、有意なはずの2人ではなく1人のラウラだった。

鈴とセシリアの首にはワイヤーブレードがまかれている。

ラウラのIS——『シュバルツェア・レーゲン』の装備だ。
そして、そのまま自分のもとにたぐり寄せ、暴虐が始まる。

殴る、蹴るの繰り返し。

2人の腕に、脚に、体にラウラの拳がたたき込まれた。

「これじゃシールドエネルギーが持たない！」

2人のISのどんどんダメージが増加していく。

この状態でISが強制解除されれば、冗談抜きで生命の危機にかかわる。

だが、そんなのお構いなしでラウラは手を止めない。

いつもの無表情な顔が、確かな愉悦に口元をゆがめたとき、一夏の何かが切れ、白式を展開しようとした時だった。

ドギユウウウンツツ！！！！

いきなりアリーナのピットから放たれたのはビームマグナムそのものの。

その一撃はラウラのワイヤーブレードを焼き切った。

さらに立て続けに2発目、3発目が放たれる。

ドギユウウウンツツ！！！！

ドギユウウウンツツ！！！！

5発目撃ち終え、ピットからその影が出てきた。

全身の装甲は開き、むき出しになった内部装甲は赤く発光している。アルの純白の全身装甲のIS『一角』のリミッターが解除された状態『デストロイモード』だ。

「来たか、負け犬」

「
•
•
•
」

第18話 怒り（後書き）

次回こそラウラフルボッコのターン！

目には目を、歯には歯を、暴虐には暴虐をです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第19話 暴虐と暴虐

「来たか、負け犬」

ピットから出てきたのはアル。

展開した一角はリミッターが解除されている。

ラウラよりも冷たい瞳は、彼女を睨む。

今回はしっかりとシールドを持っているが、もう片手には何も握られていない。まさかとは思うが、素手で戦う気なのかもしれない。

「・・・」

「来い。もう一度敗北を叩きつけてくれる」

ラウラと距離を少し置いて鈴とセシリアが倒れている。

ISは強制解除され、見る限りは命に別状はない。

挑発してくるラウラに対し、アルはまたもや無言。

だが行動は速い。目にもとまらぬ速さの瞬時加速を使い間合いを詰める。

その驚異的加速にラウラは驚くが、まだ驚く程度。

瞬時にA I Cを発動させ、動きを止めようとする。

しかし。

「なに!？」

確かに動きを止めたはず。

否、止めることができなかった。

一角の驚異的加速はA I Cよりも速い。

だが乗っているのは所詮1ヶ月や2ヶ月程度の素人。

さらには一度コテンパンにしたのだ。

パワーだよりで自分に勝てるわけがないとラウラは確信していた。

だがその考えが間違いだ。

今のアルは、アルであってアルではない。

クラス対抗戦に乱入してきた謎の緑色のI S ――クシャトリヤをたった1人で、しかも奪われた甲龍のコアを奪還して撃退したのだ。

いまだに候補生のラウラは敵ではない。

そして、今度はアルの攻撃が始まった。

バキヤッ!!

まずは右ストレート。

とらえたのはラウラの主力装備レールカノン。

貫いた右手を引き抜き、今度は左手で引きちぎった。

引きちぎったレールカノンを投げ捨て、再び攻撃に移る。

素人の動きを止められなかった。

それだけでもラウラのプライドが許さないのに主力武器まで破壊された。

これ以上の屈辱はない。本気でつぶす気にかかる。

両腕のプラズマ手刀を展開させ、反撃に入った。

だが、ラウラ程度じゃ今のアルは止められない。

アルは再び姿をくらます。

すぐさまその姿をとらえようと、ハイパーセンサーが探すがコンマ1秒遅い。

気がついた時にはアルはラウラの腹めがけて右回し蹴りをたたき込んでいた。

「ぐはっ!!」

アリーナの壁にたたきつけられるラウラ。

攻撃を当てるところか手を出せない。

しかもこの痛みで絶対防御機能が機能していないことに気がつく。

ゆっくりと足音を立てながら近づくアル。

その冷たい瞳はラウラ以上。

敵を抹殺するマシンのようだ。

壁際で倒れているラウラをつかみ上げ、右アッパーを繰り出す。

絶対防御が切れているからやめてくれ、なんて言えない。

さっきまで自分がやっていたこととほぼ同じことなのだから。

空中を舞うラウラに、アルは左手で地面へ叩き落とすと言わんばかりに拳をたたき込む。これは完璧に模擬戦でも何でもない。暴力だ。重力に従い、ラウラは再び地面に落ちる。

だがアルはそれを許さず、空いた右手でラウラの首をつかみ上げた。

さらにそのまま右足のひざでひざ蹴りを繰り出す。

無力なラウラは今の今まで気絶していない。

その部分だけは認めてもいいところだ。

だがそのぶん痛みは直に伝わってくるだろう。

ひざ蹴りを直撃させ、右手を離すが追い打ちでアルはシールドで思いつきりタックルをかます。

再びアリーナの壁にたたきつけられる。

そう思い、衝撃に備えていたラウラの期待をアルはことごとく裏切った。

ガシッ

最後の最後で首を掴まれた。

そしてそのまま力を入れられ、息が苦しくなる。

「ぐ……う……」

「……」

ギリギリと力を込めていくアル。

だが、自然と力が抜けていくのをラウラは感じていた。

最終的にはアルはラウラを手放し、その状態で固まってしまう。

赤く発光していた内部装甲は光をなくし、灰色に戻る。

そして全ての装甲は閉じ、アルは動かなくなった。

side out

（ISの破損レベルはD手前。まさか手加減されていたと言うのか？）

同日夕方。

アルに本気で蹴られたり殴られたりしたはずなのに特に怪我はなか

った。

これは手加減をされていた、ということだろう。
もしくはそれ以外のなにか。
どちらにせよなめられていたということには変わらない。

そして専用機『シュバルツェア・レーゲン』の破損レベルはギリギリE。

自分がボロボロにした鈴とセシリアの少し手前。
Cまで行けば、トーナメントには出れない。

だがD手前ということは、まだ直せば出られる。
つまり、トーナメントで決着をつけろ、ということなのだろう。

(いいだろう。私が負け犬に負けていいはずがない!)

side out

「ん・・・あ、あれ・・・？」

目が覚めるとそこは自室、ではなく保健室だった。
起き上がると横にはセシリアと鈴。
前にはシャルルと一夏の姿があった。

「僕、何してたの・・・？」

「お、覚えてないの!？」

「・・・うん」

「自分でラウラをボッコボコにしたのに？」

「そ、そうなの？」

アルの記憶にはラウラと戦った、というものはない。
覚えているのは、ピット内での準備。

そしてそこから見たラウラの暴虐だけ。

記憶がなくなったのは、やめろ、と思ったときからだ。

それを聞いた4人は呆れた。

むしろ、どうして記憶がなくなるのかわからない。

だが一夏は少し心当たりがあった。

毎回、といっても3回だけだがデストロイモードに入るとアルは無
言になる。その時だけ、何かが起きていて、アルの記憶がないんじ
やないか。

セシリアの時は覚えていたが、その節が有効かもしれない。
それでも、一夏はアルが許せなかった。

ラウラの暴虐は確かに許せない。

だが、それに対し同じ暴虐で返すのはダメな気がする。

そういう場合は、正々堂々と正面からやるべきだと。

それを一夏はアルに正直に伝えた。

「あ・・・えつと————」

アルが喋ろうとした時だった。

ゴゴゴゴゴゴ・・・!!!!

どこからか地鳴りのようなものが聞こえる。
現に保健室の棚の便は揺れていた。

そして――――

ドゴーンッ!!

「アル（ラプラス）君！」

「デュノア君！」

入り込んできた、いやなだれ込んできたのは大量の女子。

その手には全員同じ紙が握られている。

書かれている内容は次の通り。

『今月開催される学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、2人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた者同士で組むものとする』

全員の目的は男子2人のどちらか。

シャルルは女子だが、男装しているため男子と思われる。

「私と組もう、アル君！」

「私と組んで、デュノア君！」

なんでいきなりこんなルールになったかはわからないが迷惑だ。
だが、アルにとってはちよっとチャンス。

困惑するシャルルには悪いが、今度何かお詫びするつもりだ。

「つと、その・・・一夏、僕と組んで」

「え？」

『え？』

声をあげたのは一夏だけではなくその場全員。

まさか一夏を選ぶなんて思ってもいなかったのだろう。

「さっき、一夏言ったよね。正々堂々やるべきだって」

「・・・うん」

「だから、僕はラウラと正々堂々と戦う。だから一夏にはそばで見
ていてほしいんだ。ちゃんと正々堂々戦ってる所を」

「わかった」

ちよつと告白まい。

だが一夏自身はそう受け取っていないし、アルもそのつもりはない。
まあ、その場の全員は勘違いしているが。

そんな時。

ぐううゝゝゝ。

「っ!？」

「くすくす）ご飯、食べにい行こっか」

「う、
うん・
・
・」

第19話 暴虐と暴虐（後書き）

次回は学年別トーナメント！

アル&一夏の相手は！？

そしてラウラのペアはまさかのあの人！？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第20話 学年別タッグトーナメント 前編

『誰かと一緒に何かをやるときは、見栄なんか張らないで、ちゃんとお互いに頼ることが大切なんだ』

つい先日思い出した姉の言葉。

あの日から、ずっと忘れていた記憶のかけら。

そのほんの一部が思い出せた。

一角に乗るⅡ記憶を取り戻せる。

確定事項ではないが、何かを思い出すにはいいきっかけだ。

（そうだったね。頼ってもいいんだよね）

今日は学年別タッグトーナメント当日。

アルは一夏とペアを組んで出場だ。

更衣室でトーナメント表を見ると、組み合わせは最悪。

Aブロック 1回戦 一組目

アルフォンス・ラプラス&織斑 一夏

VS

ラウラ・ボーデヴィツヒ&シャルル・デュノア

完璧に狙っているような気がするが、気にはいけない。

アルにとってはどちらも強敵なのだから。

（参ったなあ・・・シャル、最近機嫌良くないし、必要最低限のことしか離してくれないからなあ。しかも1回戦目から当たるなんて。もっと言えばペアはラウラだし）

ちらっと横を向くがちょっと不機嫌そう。
ため息をつくアルは災難が付きなさそうだ。

（ま、どっちにしても負ける気はないけどね）

side out

「まさか1戦目で当るとはな。待つ手間が省けたぞ、負け犬」

「こっちも。まったく同じ意見だね」

目の前にはラウラとシャルル。
それに対峙するのはアル、隣に一夏。
そして試合開始5秒前になった。

4，3，2，1———試合開始

「「たたきのめす！」」

試合が始まった瞬間、重なる2人の声。

アルは右手にハイパーバズーカ、左手にはシールドで、その裏にガトリングガン2挺を連結させて装備している。

瞬時加速を使い、ラウラではなくシャルルに、アルが、はなく一夏が突っ込んだ。シャルルは想定外の事で、防御が間に合わず、まともに一夏の零落白夜を喰らってしまう。

『まず、一つ目の作戦はフェイント』

『う、うん』

『僕がまず最初にラウラに特攻を仕掛けるふりをして加速を करा。そうしたら一夏は瞬時加速と零落白夜を使いながらシャルに斬りかかって』

『うん・・・って、ええっ？』

『ラウラはたぶんA I Cで僕の動きを止めに来る。そうすると一夏の攻撃が簡単に入るんだよ。でもそこをシャルがフォローしてくると思うから、そこを狙うんだ』

試合前に行った即席の作戦会議。

その内容の一つ、フェイント作戦は成功だ。

一夏の白式の単一仕様能力『零落白夜』

使用中はシールドエネルギーを使う諸刃の剣だが、その能力はバリア無効化攻撃。本体に直接ダメージを与えることができる。

そのおかげで、シャルルのシールドエネルギーは500から200まで削れた。

先に攻撃を仕掛けたことから、流れはアルのペアに向く。だがラウラはもともとシャルルなんて眼中にない。

A I Cで捕まえたアルに左肩のレールカノンを向けた。

「はあああっ!!」

「ちっ!」

すぐさまこちらへ戻ってきた一夏がラウラに斬りかかる。
だが、それをなんなく避けるラウラ。

しかし動きを止めていたアルに自由が戻ってしまう。

「一夏！」

「了解！」

二つ目の作戦はまずシャルルを潰す。

例えラウラが多対一の戦闘に特化をしていても、それには欠点がある。

だがその欠点をシャルルが埋めかねないので、厄介なシャルルを癖などを知ってるアルが相手をして倒してから、ラウラを2対1で相手をしようとなった。

ガキインッ！！

右手に持っていたバズーカを格納し、サーベルに持ち替えての近接戦闘。

シャルルは持ち前の器用さを使い、接近ブレード『ブラッド・スライサー』をコールしてアルの攻撃を受け止めた。

「アル、手加減はなしだよ？」

「（なんで笑顔なの！？すっごく怖いんだけど！）わかってるよ！」

左手にもつショットガン『レイン・オブ・サタディ』が火を噴く。
シャルルの特技『高速切替』で現れたそれを、アルはかわすことができない。

零距离射撃を恐れ、無理やり弾いてシールドを構える。

だがシャルルはアルが離れるのを許さない。

近接ブレードでもう一度接近戦に持ち込んでくる。

シャルルの戦い方は『砂漠の逃げ水』ミラージュ・デ・デザート

近距離で斬りあっていたと思えばいきなり零距离射撃。

間合いを離せば剣に持ち替えてまた近接格闘。

押しても引いても崩すのが難しい戦法だ。

しかし、その戦い方が今回はあだとなった。

ジャキツ

「零距离射撃には零距离射撃でどお？」

シールドで防御の構えを撮っていたと思ったシャルル。

一気に間合いを詰めてきたタイミングを逃さず、アルはシールドの裏に装備したガトリングガン突き付ける。

そしてお返しといわんばかりにガトリングガンを近距離で乱射しまくった。

ガガガガガガッッッ!!!!!!!!!!!!!!

手に持つ近接ブレードで数発はじく。

だがガトリング、しかも2挺分はさばき切れるはずがない。ほどなくしてシャルルは緑色の雨に包まれた。

side out

一方ラウラvs一夏。

接近武器しかない一夏はラウラの猛攻を1人で耐えていた。

集中力を最大限まで高め、プラズマ手刀とワイヤーブレードを弾く。油断して距離をとってしまわぬよう、注意しながらいつ切れるともわからない集中を限界まで維持する。

アルがシャルルを少しでも早く仕留めてくれれば、後は何とかできる。

そう信じ、耐え凌ぐ。

零距离での高速戦闘はやはり集中力を使う。

もう持ちそうにはない。

「・・・そろそろ終わらせるか」

そう呟き、プラズマ手刀を解除する。

そして右手をかざした。

やばい！

そう確信した刹那、一夏の動きはピシリと止まった。

ワイヤーブレード2本と、左手のプラズマ手刀が一夏に襲いかかる。その時だった。

ドギューウウンッ！！！！

一夏とラウラの間をビームマグナムが駆け抜ける。

ワイヤーブレードは依然と同じように焼き切れ、ラウラの左手のプ

ラズマ手刀を掠めた。

A I Cを解除し、すぐさま距離をとる。

先を掠めただけなのに2割もシールドエネルギーを削られたのだ。
直撃したら、なんて考えたくもない。

「お待たせ」

「シャルルは？」

「ガトリングの雨を喰らってお休み中」

バキンッ

連結部分が外れる音がして、左手のガトリングガンが2挺とも崩れ落ちる。

地面に落ちると同時に粒子に変わり、格納された。

「さあ、こっからが本番！正々堂々と2対1！」

第20話 学年別タッグトーナメント 前編（後書き）

次回もタッグトーナメントです。

ラウラが暴走しますね。

後、アル君がデストロイしますね。

全然制御できないけど。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第21話 学年別タッグトーナメント 後編

「これで決める!!」

零落白夜を起動させた一夏がラウラへ突っ込む。

ラウラのA I Cによる拘束攻撃が連続で襲いかかる中、急停止、轉身、急加速で何とか切り抜ける。

この集中力がどこまで持つかが勝負のカギだろう。

「ちよろちよろと目障りな・・・!!」

立て続けにワイヤーブレード。

複雑な動きで一夏に迫るが――――

ドギユウウウウンッッ!!!!!!

ワイヤーブレードを再びマグナムが焼き切る。

何も、一夏は1人で戦っているわけじゃない。

今はアルが一緒なのだ。

「(カートリッジは残り3発。一撃でも当てられれば) 一夏!」

「了解!」

追加でさらに迫るワイヤーブレードを潜り抜け、ラウラを攻撃範囲内にとらえる。そして勢いよく雪片で斬りかかった。

「無駄だ。貴様の攻撃は読んでいる」

「普通に斬りかければね。でも、これなら？」

「!？」

一夏は足元に向けていた切っ先を起こし、体の前へ持て来る。斬撃がダメなら突撃で。読みやすさは変わらないが、線と点では捕まえるのに圧倒的に点の方が難しいのだ。

「無駄なことをっ！」

ピシリと一夏の動きが止まる。

A I Cで完璧に体を固定された。

「残念だったな」

「そう？ 私ばかりに氣をとられると、痛い目見るよ？ だって私たちは” 2人組 ” なんだから」

「!？ ――― ぐはっ!?!？」

バゴオンッ!!

ラウラの左肩に装備されたレールカノンが爆発する。

そしてそれを破壊した張本人は、バズーカを持っていた。

そう、A I Cの弱点はこれ。

1対1なら最強を誇ってもいいが、2対1のときなどは決まって片方しか動きを止められない。対象に意識を集中させねば効果がないからだ。

その証拠に一夏への拘束は解除されている。

「くっ・・・この、負け犬めが!!」

ワイヤーブレードを多数展開し、アルへ襲いかかる。
だがアルは今、一夏と2人組みなのだ。
片方だけに気をとられれば大変なことになる。

「だから、痛い目見るよって言ったじゃん!!」

「っ!？」

再度雪片を構えた一夏。

今度はよけきれない、一撃必殺を確信した。のだが――――

キュウウウン・・・

「ええっ!？ちょ、こんなときにエネルギー切れ!？」

零落白夜の使いすぎだろう。

エネルギーの刃は徐々に小さくなり、そして消えた。

「残念だったな」

一夏の懷に飛び込むラウラ。

その両手はプラズマ手刀が展開されている。

今の一夏のエネルギー残量なんて、蝋燭の灯も同然。
ちよつとでも掠ればゲームオーバーだ。

だが、そんなのはアルが許さない。

バキッ!

瞬時加速を使い、2人の間に割り込む。

そして思い切りラウラを殴った。

「まずはセシリアの分。で、これは、鈴姉の分！」

立て続けに、今度はシールドで殴る。

武器を使わない肉弾戦、なんてあまりいいものじゃないが、それでも十分威力はある。

おかげでラウラのシールドエネルギーをこっそり奪うことができた。

ビームマグナムは使わない。

むしろ、殴りでお返しした方が清々する。

そして最後の一撃を叩き込んだ時だ。

機体に紫電が走り、ISが強制解除されそうになる。

だが次の瞬間、異変が起きた。

s i d e o u t

「うああああっ！！！！！」

突然、ラウラが叫びだす。

それと同時にシュバルツェア・レーゲンから激しい電流が流れだし、間近にいたアルを吹き飛ばす。

「アル、大丈夫！？」

「う、うん。大丈夫」

吹き飛ばされたものの、機体には何の問題もない。
だが目の前ではラウラのISが”変形”していた。
いや、変形ではない。

ドロドロと溶け出し、流動したそれはラウラを包みこんでいく。

ISは原則として変形はできない。

あるとすれば『初期操縦者適応』と『形態以降』ぐらいだろう。
そんなあり得ない事が目の前で起きていたのだ。

シュバルツェア・レーゲンだったそれはラウラを包み終わると、表面を流動させながら、少しづつだが形になろうとする。

やがて、形をなしたそれはISに似た”なにか”だった。

最小限のアーマーが腕と脚に。頭部はフルフェイスのアーマーで、目の個所は装甲の下にあるアイラインセンサーが赤い光を漏らしている。

そしてその敵にある武器は——『雪片』

かつて千冬が使っていた刀。

それに酷似、いや、もはや複写してるようだ。

「っ!？」

形が整うと同時に、それは突然一夏との間合いを詰めてくる。

さらにそのまま勢いよく必殺の一太刀を入れてきた。

「一夏!」

ガキィ、バキィッ!!

2人の間に飛び込み黒いISの攻撃を受け止める。

受け止めたシールドは雪片に似た刀により、一刀両断。
勢いはそのまま、アルの頬を掠めた。

「っ!？」

体制を立て直している次の瞬間だった。

再び、今度はアルの懷に飛び込んできた黒いIS。
刀はアルの首めがけて振られた。

(やばい、死ぬ・・・)

ガキンッ!!

一瞬のことだった。

死を確信したアルは何もできずにそれを迎える。
そう思っていたが、それはやってこない。

気がつけば、一角はリミッターが解除されていた。
右手を構え、ビームトンファアを使って刀を受けてめている。
その瞳はいつものように酷く冷たく、冷徹だ。

防がれたのを確認した黒いISは距離をとる。
アルもそれを見てトンファアのサーベルを解除し、背中のサーベルを抜いた。

全員が見守る。

一角の姿の変わった今のアルにはだれも勝てない。
例えば黒い謎のISだからといっても、4枚羽をたった1人で撃退した今のアルに敵はいないのだから。

そしてついに動いた。

先に仕掛けたのはやはり黒いISだ。

ガキッ！バキィ！ガキィン！

千冬の動きを真似た太刀筋。

素人のアルじゃ、避けることはできないと思えた。

だが、アルはあろうことかそれらすべてを右手に持ったサーベル1本で受け止めており、やがては動きが止まる。

ギリギリと無理に弾こうとする黒いIS。

冷たい眼のアルは珍しく口元が笑っていた。

そしてついに、今まで使わなかったもう1本のサーベルを引き抜き、勢いよく受け止めていた刀に斬りかかり、黒い雪片をへし折った。

しかし、すぐに雪片を再生させようとする。

流動する体と同じ物質だから出来ることだろう。

そんなことはさせまいと、アルは両腕を振り上げ、そのまま両手を振りおろした。

それを危険と感知した黒いISは両腕でサーベルを受け止める。

だが受け止める場所が悪かった。掴んだのはサーベルの刀身自体だ。力をいれると、そのまま両腕を焼き切っていく。

さらにサーベルを左右に開き、両腕を使いものにならなくした。

「死ね・・・」

その小さなつぶやきはだれにも聞こえていないだろう。

アルはまず左手のサーベルで脚を両断、右腕でボディを縦に切り裂いた。

まさかラウラごと斬った!?

全員がそう思う中、切り裂いたボディからラウラが出てくる。

どさりと地面に倒れるが、アルはそんなものには興味なし。

再びラウラを取り込もうとする黒い塊に向けてビームマグナムを構えた。

ドギユウウウンッッ!!!!!

ドギユウウウンッッ!!!!!

ドギユウウウンッッ!!!!!

残りの3発すべてを何の躊躇もなく、すぐそばにラウラがいるにも関わらず撃ち放った。そこに残ったのは排出されたカートリッジと、シュバルツェア・レーゲンの残骸とコア。
そしてそれを破壊した一角とアルだけだった。

第21話 学年別タッグトーナメント 後編（後書き）

2日ぶりの更新でしたね。

遅れて申し訳ありません。

今回はまさしくデストロイ。

全部戦闘描写で終わるのはやっぱり良いですね。

それにしても、デストロイのときに相手が無口だと会話が少なすぎて寂しい・・・。

片方が無口でもう片方が無口（といくか口なし）。

結局地の分だけで寂しいです。

現に今回の終盤はそれでしたし。

まあ、次回はラウラと保健室での話（アル君の独り言）
それと翌日のアレですかね。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第22話 和解

目が覚めると、またもや保健室だった。

もうこのパターンは慣れている。

どうせまたデストロイモードを使って何かしたに違いない。
記憶がないのはいつものことだ。

気がつくと、横から会話が聞こえた。

この声は千冬とラウラだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

「お前は誰だ？」

「え、あ、わ、私は・・・私、は・・・」

突然名前を呼ばれたかと思えば自分は誰かと聞かれた。

困惑するラウラは、自分の名前を言ってない。

いや、言えないのだろう。

そんな何も言えないでいるラウラに、千冬は少しおかしなことを言った。

「誰もいないのならちょうどいい。お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。何、時間なら山のようにある。何せ3年間はこの学園に在籍しなければならぬのだからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

励ましの言葉を言い終えると、千冬は保険室を出ようとする。その時に、一瞬目があってしまい、アルは目をそむけてしまった。それを見て少し口元を緩め、捨て台詞のように言い残した。

「ああ、それから、お前は私や誰かになることなんてできないぞ」

言いたいことを言って逃げた。

いろいろ言っておきながら、結局は自分で考えろ。

あの千冬がこんなにずるいなんて思っていなかった。だからこそか、なんだか笑えて来てしまう。

「（全くホントずるいよ。僕に後始末任せるなんて）ラウラ」

「っ」

先ほど、保健室を出るときにアイコンタクトで頼まれた。本当に迷惑でずる過ぎる。

そんなカーテン越しのアルに対し、今のラウラは喧嘩腰じゃない。さっきまで千冬と話していたからだろうか。アルとしては話しやすくて助かる。

「お前が話す前に、一つ聞きたいことがある」

「何でも」

「・・・お前は、どうしてそんなに強いんだ？」

意外なことを聞いてきた。

アルよりも、はるかにラウラの方が強いのに、なんでそんなことを

聞いてきたのだろうか。だが返答は同じだ。

「僕は弱いよ。誰よりも、ラウラよりも、一夏よりもね」

「弱い？ そんなに力を持っていて、なんで弱いなどといえる？」

アルは自分自身のことがよくわかっていた。

一部の記憶がないからといっても、それに変わりはない。

だから、誰かに強いと言われても、弱いとしか返せなかった。

それに対して、ラウラは疑問しか浮かばない。

自分をたたきのめした、完膚なきまでに敗北を突き付けてきたのに、わからなかった。

「そうかな。それだとしても強さは人それぞれだよ。僕がラウラに勝てるのはISに関する知識だけかな」

「・・・お前、私をなめてるのか？」

「ううん、全然。それに、それでもラウラが僕を強いって思うんだ
ったらそれはただ、僕が強がってるだけ、強くなろうとしてるだけ
だからだよ」

「・・・」

「それとね、強くなったら誰かを守りたいんだ」

ラウラはついに黙り込んで聞き始めてしまった。

だが、それはちゃんと聞いてくれているという証拠だ。

アルはさらに続ける。

「僕、家族を亡くしちゃったからさ。強かったら、誰かを守れるでしよ。誰かを失うのはもう嫌なんだ。ラウラが誰かを傷つけようとするば怒るし、ラウラが傷つけられれば怒る。だから、ラウラも守れたらいいなって思ってるんだ」

「っ・・・」

その言葉に、ラウラは何かを感じた。

今まで負け犬だと罵っていた相手に、胸がときめいた。始めての衝撃に、心が強く揺さぶられる。

そんな時だ。

ぐうくぐう

「っ!？」

「ふっ、ふふ、はははっ」

「むう、おなかすいてきたなあ。僕、そろそろ行くね。また明日」

「ああ、また明日な」

side out

翌日。

トレーニングは中止らしい。

まあ、当然だろう。

一回戦目からあんなことがあったのだから。

それでも、データ取りのために一回戦全てはやるらしいが。

それと昨晚、ついに男子の大浴場が解禁になった。

といっても、使うのはアルだけだろう。

何せシャルルは男装してるとはいえ女なのだから。

入ろうかな、なんて思ったがその気になれない。

なぜか。それはアルが風呂があまり好きではなく、シャワー派だからだ。

そこから昨晚はシャルル1人が大浴場に入り、アルは部屋でシャワーを浴びた。

それにしても朝からシャルルを見かけない。

「先に行つて」と言われたが何かするのだろうか。

ついでに言うならラウラもない。

アルは昨日の内に事情聴取を受けたが、ラウラはたぶん今受けているだろう。

「み、みなさん、おはようございます・・・」

挨拶をしながら教室に入ってきた山田先生は朝からダメージを負っていた。

朝っぱらから誰とどんなバトルを？と思ったりもするが気にしない。どうせ千冬をからかって返り討ちにあったに違いない。違うと思うが。

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。ああ、で

も転校生というか、すでに紹介は住んでいるといえますか、ええと・
・」

また転校生。

それでも紹介は済んでいる。

どういふことだろうか。

しかし、アルはそんな少ないヒントで理解した。

ああ、そういうことか。自分が今までやってきた苦労は水の泡なんだと。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

聞こえてきたのは聞きなれた声。

金髪の転校生（？）は前に見た男子の制服ではなく女子の制服。しかも意外にスカートの丈が短くて際どい。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしく願います」

ペコリと一礼をするシャルル、ではなくシャルロット。

クラス全員は口をぽかん開けて呆けている。

アルに至っては頭を抱え、ため息をつきながら首を横に振っていた。

「え、デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、アル君同室だから知らないってことは——」

「ちょっと、待って！昨日、男子が大浴場使ったわよね！？」

ギリ

少し痛いところを突かれた。

確かに幼馴染で同室だから知らない、なんてことはない。

だが浴場は使ってない。

そう言おうとするが、どんどん教室がざわつき始める。

これはやばい。何がやばいかはわからないが、何か来る気がする。

ドガアアンツ！！

教室のドアが蹴や破られるように開けられた。

「アルウーツ！！」

登場してきたは甲龍を展開させた鈴。

見るからにお怒りの様子だ。

「死ねっ！！」

ISアーマーが展開される。

さらにはそれと同時に衝撃砲がフルパワーで解放された。

って、あれ？これ、今度こそ死————

ズドオオオンツツ！！！！

物凄い音が聞こえる。

それにしても痛みが来ない。
ということは死んでないということだ。

目を開ければ、そこには黒いIS。

シュバルツェア・レーゲンを纏った銀髪眼帯の少女。

あのラウラが2人の間に割って入ってアルをAICで助けたのだ。

「ラウラ、ありが———」

ぐいっ

いきなり胸倉を掴まれて引き寄せられる。

これは、まさか！

僕のファーストはまだ誰にもあげられないよ！？

がしっ！

間一髪ところでラウラの肩に手を当てて止める。

だがISの力が強すぎるため勝てない。

「ス、ストップ！！お礼は言うけど何する気なの！？」

「お、お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「誰に教わったその知識！！」

第22話 和解（後書き）

ようやく2巻も終了。

もう少しで3巻に入ります。

臨海学校ではあの天才が現る！

さらには謎のISがもう一機！

あ、赤い、彗星・・・！？

そして次回はちょっと違う視点。

学園側じゃなく、袖付き側と、アル君の昔話です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034x/>

IS 一角と少年 にっ！

2011年10月23日21時46分発行